389
72

389-72

曾我の家五郎喜劇全集 第七編

曾我の家五郎著

株式會社 大鐙閣刊

大正
11. 5. 20
内交

自我の家五郎の横顔

皇族の各自後の後年

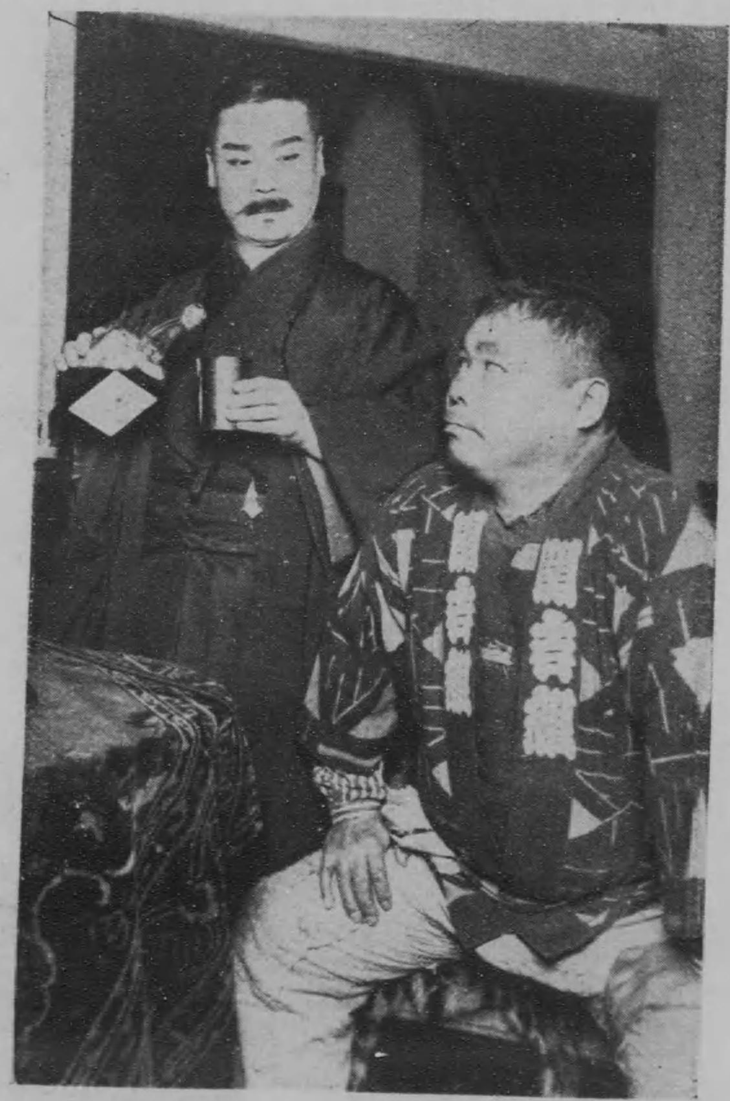
曾我の家五郎喜劇全集 第七編

目次

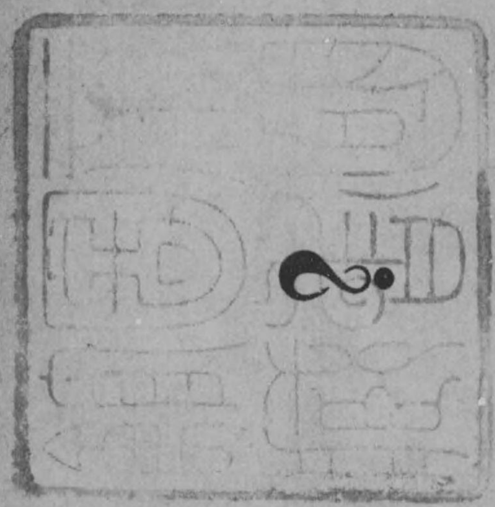
一 ? ……一
一 芳村一雄宅の一室の場 ……五
二 同家庭園の場 ……六〇
二 小三徳兵衛吾妻草紙 ……七三
一 江戸兩國船宿武藏屋の場 ……七七
二 大阪市岡新田田植の場 ……一〇四
三 同村外れ茶店の場 ……一二三
三 水晶の名玉 ……一三三

藝妓松の家てる子宅の場……一三五
四　安　宅……二〇九
一　安宅の松……二一一
二　關　所……二二七
五　有情無情……二三七
一　本牧待合小笹裏口の場……二三九
二　島村醫院診察室の場……二七八
六　愛の結晶……三〇三
某監獄署表門の場……三〇四

目次終



?



【川 崎】

はしがき

佛國で有名な科學者、哲學者、社會學者として知られて居るポール・ラファルグと言ふ先生の最近の大發見であるこ聞きましたお話を、其の儘曾我の家一流の狂言に揑ち上げました一幕もの。何んな物が出來ますか、作者も役者も存じ不申、大膽不敵な盲目蛇、其れを御笑ひ下さりませ。

著者　曾我の家五郎

(一) 芳村一雄宅の一室の場
(二) 同　家庭園の場

登場人名		【俳優】
實業家	芳村一雄	五郎
同夫人	信子	大磯
同乳母	お政	五良丸
同書生	松下	蝶太夫
同玄關番	三太夫	蝶七
同事務員	林正夫	五六
同小間使	八重	時和
同下女	お種	林蝶

礦山會社課長	金井武雄	小次郎	
醫學士	山部清一郎		
手傳職人	中山楠雄	蝶六	
來賓紳士	吉田行雄	致雄	
同	山本某	笑將	
同	豐部某	十一	
同	新田某	祐之助	
同	林某	長佐久	
同	長谷部某	一雄	
同	山名某	時太助	
同藝妓	友葉	壽蝶	
同	玉龍	一福	
同舞妓	房松	二三雄	
	ト龍	胡蝶	

(1) 芳村家一室の場

本舞臺、立派なる西洋館の飾附、五寸高に美しき敷物を敷詰め、上手二重斜に奥へ通ずる出入口、大理石の兩柱に絞上げたるカーテンの房つき、洋畫の大額を所々に上げ、正面廊下を隔てゝ手摺付好みの向ふ奥庭を見る。同じく大理石の大柱を左右に、花模様の壁紙。下手落間になつて斜に一間の開き扉を設く。靴脱、ステツキ差、帽子掛、テーブルに花瓶を置き、寒紅梅を入れる。此の正面の室にも二三の油畫の額を位置よく上げ有る。中央に稍々大なるテーブル其の上に電話機、新聞、美事なる灰皿、盛花、卓上電燈、呼鈴、置時計等。本物の水菓子を籠に盛りたるもの、ツ

ユークリムを盛りたる菓子臺、舶來の洋酒臺には五色の酒を盛る臺附コップ四五個佛へ附け有る。上手に美事なる長椅子を置き、中央には皮張りの主人椅子、並に上等の椅子を四五脚置き、控へ椅子を正面の處に五脚程位置よく置き有る。總て贅澤なる上流の家庭の一室の模樣。靜に囃子にて幕開く。

ト上手主人椅子に當家の主人、芳村一雄和服姿にて紫光線の電流にて頭を治療なし居る。下手の庭に乳母お政は上品なる拵にて乳母車に乘せた赤坊を運動をさして居る、書生松下はベン〳〵太鼓を打ちながら其の車と共に歩きながら歌を唄うて居る。幕開き前よりズーと赤子笛のみ盛んに聞かす事。

松　下「ネン〳〵や、ネン〳〵や、ネンネのお守は何處へ行た。山を越へて里へ行た。里の土產に何を貰うた……」

ト此の間頻に赤子の泣き舞を聞かす。

芳　村「ライ〳〵其處に泣かして遣つて呉れるなよ」

お　政「デモモウ何時も御休みの時間で御座りますのに、今日は怎うしたのやらお休みになりませんので……」

芳　村「いくら寢ようと思つても松下の樣に耳の傍でドン〳〵太鼓を叩かれては、坊やだつて寢られやしない、そりや寢さして居るのぢやない起して居るのだよ」

松　下「デモ乳母やが子守歌を唄へと云ひますが、僕は唄ひ方を知りませんから、自然あんな活潑の子守歌が出來上がるのですよ」

芳　村「それぢや不可ないよ、子供を眠らす樣に靜に唄つて遣らなけりや寢やしないよ」

松　下「それが僕には出來ないのですよ」

お　政「唄へん事が有るかいな、かう唄うのやがな、ネン〳〵〳〵〳〵や……」

ト長く引いて唄ふて聞かす。

松　下「成程甘いねへ」

ト椅子に腰をかけて聞く、

お　政「ネンネの守は何處へ行つた……」

松　下「成程一寸眠くなるね」

お　政「山を越へて里へ行つた……」

松　下「フン〳〵」

お　政「里の土産に何に貰うた……」

松　下「グウ〳〵」

ト眠り出す、

芳　村「オイ松下、貴樣が寢る奴が有るかい」

松　下「ハアツ、實に良い氣持ですなア」

お　政「宜い加減にして置きなはれナ、誰れが貴方の守をしますかいな、阿呆かいな」

松　下「阿呆かいなこは怪しからんね」

お　政「又賢こいお方こ申上げられますかいな」

松　下「無禮な事を云ふなッ」

芳　村「オイ〳〵お前方坊やを捨てゝ置いて喧嘩をしては困るねへ、坊やは怎うして居るのだ」

お　政「おゝ忘れて居ました」

ト赤ン坊の傍へ來りて、

「おゝ坊チヤンは良い御休みで御座ります」

芳　村「守の無い方が宜く寢るこは堪らないねへ、夫れでは寢室のベットへ其の儘靜に寢かして遣つて呉れ」

お　政「畏りました」

ト赤ン坊を抱き上げて松下に、

「これ乳母車を片附けときなはれや」

松　下「貴様が片附けんかへ」

お　政「私は坊ちやんを抱いてますがな、何時もの處へ直して置きや」

松　下「俺は貴様の奴隷ぢやない、馬鹿ッ」

お　政「馬鹿こは何んや」

芳　村「コレッ、又坊が起るぞ」

お　政「ハイ……ネン〳〵〳〵や……」

ト守唄を唄ひながら廊下より上手奥へはいる。松下は手荒く乳母車を引いて同じく下手廊下の奥へはいる。

芳　村「實に仕方の無い奴等だ……」

ト此の時事務員林正夫、洋服姿にて手に數通の通信、新聞、手紙、葉書を持ち下手の扉よりいで來り、主人の前へ置き、

林　「通信で御座います」

芳　村「實に毎日々々澤山な通信で厭になるねへ」

林　「夫れから先刻代議士の丸山さんが今日四時に御見えになるこ云ふ御使ひで御座いました」

芳　村「フン又軌道鐵道の資金を頼みに來たのだらう」

林　「夫れから信州の例の石材は全部良好で、豫算より十五萬圓斗り利益が多いこ支配人からの電話で御座いました」

芳　村「アヽさうかよし〳〵」

林　「夫れから先刻市役所から、飛行機の寄附こ云ふて參りました」

芳　村「よし〳〵」

ト此の時上手より下女お種ッカ〳〵といで來り、

お　種「旦那様只今骨董屋の佐々木が栖鳳の軸を持つて參りました」

芳　村「今日は面倒だから明日來いと言ふて置け」

林　「夫れから先刻自動車屋が參りまして、獨逸から新式の車が參りましたから是非明日でも御召を願ひ度いと申して參りました」

芳　村「よし〳〵」

お　種「夫れから今朝から參つて庭を遣つて居ります手傳が、飛名の位置を一寸旦那に見て頂きたいと申して居ります」

芳　村「よし〳〵」

林　「明日の石油會社の重役會議へは是非御出席が願ひたいと、言ふて見へまして御座います」

芳　村「煩いねよし〳〵」

ト此の時松下廊下よりリカ〳〵と出て、

松　下「旦那市會議員の吉田さんが見へました」

芳　村「アヽさうが……煩さいねへ」

林　「夫れから先刻お歸りになりました御客樣が……」

芳　村「煩さいね……判つてるよ」

お　種「奥樣はお書は何を召上りますと、おつ仰つて居られます」

芳　村「煩ひ、留守だと云ふて置け」

お　種「奥樣にお留守と申し上げるのですか」

芳　村「馬鹿ッ、家内ぢやないよ、市會議員の吉田にだよ」

林　「ハアッ」

芳　村「お前ぢやないコッチだ」

松　下「ハアッ」

ト足早にはいる、

芳　村「何を立て居るのだ、用が無ければ事務室へ行て居らぬか」

お　種「私が事務室へ參りますのですか」
芳　村「お前ぢやない、こッちだ」
林　「ハッ……」
ト足早にはいる。
お　種「御飯は何時に召し上ります」
芳　村「煩い、飯は喰はないよ」
お　種「ハイ」
ト足早にはいる、電話の鈴がなる。
芳　村「煩いねえ、全く」
ト電話機を取つて、
「ハア……ナニ綿絲會社だ……内の會社が……僕だよ〳〵、お前は支配人か職工が全部喜んで居る……結構々々、工賃は二割上げて遣る事を言ふたか

ヨシ〳〵其の會社は益々利益が有るのだから……ナニ、フン〳〵……左樣なら」
ト電話を切る、上手より乳母お政いで來り、
お　政「旦那樣、奥樣が御飯を召上りませこおつ仰つて居られます」
芳　村「煩い……飯は喰ひたくないこ云ふて置け」
お　政「ハイ」
ト足早にはいる同時に電話の鈴が鳴る。
芳　村「エッ煩い……ねえ」
ト此の時上手奥より玄關番三太夫通りかゝつて、鈴の音を聞いてツカ〳〵と入り來り、
三太夫「ヘイ御用で御座りますか」
芳　村「誰も呼ばないよ」
三太夫「ベルが鳴つて居ります」

芳　村「電話が掛つて居るのだ、煩いから出ないのだ」

三太夫「其麼事をなされますと、交換手が怒ります、詰り一種の道徳上の罪人で御座ります」

芳　村「おや〳〵又爺やの變智氣論が始まつたな。それぢやお前聞いて見い」

三太夫「ハイ……」

ト電話機を取つて、

「アヽモシ〳〵何誰ですなア……ハイ御主人は爰に居られます」

芳　村「おい〳〵モウ大抵の處なら留守と云ふておいてくれ」

三太夫「ハイ……大抵の處ならお留守ですが、貴方は何方らで御座ります」

芳　村「おい馬鹿ッ、其麼事を言ふ奴が有るか、先きは何處だ〳〵」

三太夫「ハイ〳〵……新町の茨木屋」

ト之れにてッカ〳〵と芳村傍へ來り、

芳　村「おい〳〵お前誰だへ、おやお德か……なに體が惡いから出掛けないのだよ……例の胃病でサ……馬鹿な事を言ふな……家庭で其麼戯をするか……アヽ謝罪る〳〵」

三太夫「旦那はん、餘程惡るい事を仕なはつたのぢやなア……まあ〳〵堪忍してお くなはれ」

芳　村「默つて居よ……なに宜いよ、内の時代後れの禿頭よ」

三太夫「誰が禿げ頭で御座りますな」

芳　村「默つて居よと云ふに……なに來て居るお客は燒く譯ぢやないよ。それぢや電話口へ出して呉れ、座敷に居るのだね……よし〳〵待こる〳〵」

ト此の時林ツカ〳〵と下手より出て、

林　「旦那只今株式會社の井上さんが見へました」

芳　村「今重大な會議中ですから、明日でも來て下さいと云へ」

林　「ハイ」

ト再び元へはいる、

三太夫「餘程重大な御電話で御座りますな」

芳　村「フヽン一寸重大な電話だよ、ハヽヽヽ」

三太夫「中々出ませんなア」

芳　村「座敷に居るらしいね」

三太夫「何處の御座敷で御座ります」

芳　村「其麼事は聞かんでもよい、……一寸お前聞いこれ、女の聲で出たれば直ぐ知らせ」

ト電話を放れ、うつかりと紫光線の器具を渡す。三太夫は夫れで聞いて居る、芳村は電話機を頭へ當てゝ手紙を調べて居る。

芳　村「おいまだ出ないか」

三太夫「ハイ一向出ませんな」

芳　村「おい〳〵お前何を持つて聞いて居るのだ」

三太夫「旦那が之れを持つて聞いて居れこおつ仰りましたので……」

芳　村「馬鹿ッ、夫れは紫光線電氣治療器ぢやないか」

三太夫「私も可笑しいなアこ思うて居りましたのぢや、有らゆる病氣に利いてそして電話も聞くのかいなこ、思うて居ましたのぢや」

芳　村「注意しないか馬鹿ッ、電話器は怎うしたのだい」

三太夫「貴方が持つておいでゝ御座りますがな」

芳　村「アッさう〳〵」

ト受話器を取り直して、

「モシ〳〵ハヽ……最前から呼んで居た……胸で聞いて居るのだから判らないい……なに明日か明後日は行くよ、今日は御樂みだねへ……お客はあの口

だらう、馬鹿にするな……殴るぞ」

三太夫「旦那其麼手荒い事をおつ仰りますな」

芳　村「ハテ八釜敷いお話中……ハア〳〵夫れでは明日は屹度行くよ……本當だ本當だよし〳〵左樣なら」

ト電話を切る。此の一寸前より小間使お八重上手よりそつと出て今の電話を聞いて居る。此の時前にズツト進み出で、

お八重「旦那、お樂みの電話だんなア」

芳　村「おや、お前聞いて居たか、家内に默つて居れ、奥に聞へると煩いからね え」

お八重「左樣々々、奥樣丈けには煩そうで、私は怎うでも宜しいよつてなア」

芳　村「くだらぬ厭味を言ふな、三太夫が聞いて居るぢやないか」

八　重「聞いて居はつたかて大事おまへんがな、奥樣ばかり怖がつて、私は怎うでも宜しいよつてなア」

三太夫「夫りや當り前ぢやがな、奥樣は賢夫人と云はれる御方ぢやがな、お前は多寡が小間使ぢやないか、大體旦那の前で餘り剛れ〳〵し過ぎるがな」

お八重「剛々しうして濟まへんなア」

ト素知らぬ顏をして芳村を捻る。

芳　村「アツ……痛い……」

三太夫「旦那はん、怎うなされました」

芳　村「ウム……ナニ椅子で足をつめたのだ、お前は用が無いから玄關へ行つて居れ」

三太夫「へイ——、おいお八重ごん、油取らんこチヤン〳〵こ用事をしまいなや」

お八重「ピイ——」

ト横そ向く、

三太夫「旦那、あんな奴で御座りますがな」

トブツ〳〵云ひながら、下手の扉へはいる。

芳　村「おい八重、三太夫の前でつゝしまないか、勘付かれたら煩さいよ」

お八重「何んの貴下、時代後れの低能兒が、其處まで頭が働きますかいなア、併し明晩はお樂しみ」

芳　村「何がお樂しみなんだ」

お八重「只今の御電話……フヽン何んぼなこお行きやす」

トツントする科有つて、傍を放れる、途端、上手より妻信子ハイカラな奥様風の拵にて出で來り、

信　子「お八重旦那は御飯は怎うおつ仰るの」

ト之にて芳村は眞面目に濟し込み、お八重も閑雅な態度になり、

お八重「ハイ只今おすゝめ申て居りますが、矢張り厭やだこおつ仰りますのです」

信　子「又厭やなんですか、デモ今朝から牛乳一合召上つた斗りぢや有りませんか……毒ですよ」

芳　村「だつて少しも腹が空かないんだもの」

信　子「困りますね……夫れでは八重、旦那のお膳を藏つて置いておくれ」

お八重「ハイ……」

ト眞面目に一禮して、元の上手へはいる。

信　子「ネエ貴方、餘り御飯を召上がらないこ、全く衰弱致しますよ、何か食べたいこ思ふものは有りませんのですか」

芳　村「夫れが無いのだよ、實際情け無いこ思ふ、別に病氣こ云ふぢやなし、只腹が空か無いこ言ふ丈けなんだから、宴會に行つても酒を呑むのも厭や、怎うして宅に居ても時間が來ればお前にお飯こ云はれるこ、アヽ又かこウンザリするよ、

飯は一種の責め道具だね――」

信　子「おゝ厭だ、夫れぢや詰り私は責め道具の執行官ですねオホゝ」

芳　村「全くだ、昔、あゝして勞働をして居る時分には、實際飯時を待兼ねて、冷飯に澤庵でも山海の珍味と思つて空き腹へ搔き込んだ、あの時分は一升の飯は一日で足りなかつたのだが、アゝ今では結句あの時代が羨やましいよ……」

信　子「さうですわねへ、人間の成功の一面には悲哀の影が附き纏ひますねへ」

芳　村「實際だ、成功して多少財産が出來れば、飯が不味くなると云ふのは一種の眞理か知らん、裸一貫から恁うなつて、有らゆる會社を起しても豫算意外の純益だ、一度損をしたら面白からうと、損を見越してする仕事が逆に儲るのだから厭になるよ、其れを世間は盲目千人だ、頭が好いの、天才だのと新聞や雜誌に書かれるのだ、脇の下から冷汗が出るよ」

信　子「全く世の中は面白いものですねえ」

芳　村「少し大きな寄附でもすれば金で人格が上るのだもの、うちの各會社に使つて居る人間の中にも學士も有れば、博士も有る、其麼者が俺の前でペコ〳〵頭を下げて呉れると、一種の人間の心理狀態で俺は馬鹿に偉い人間の機な氣がするよ、今では世の中の事は大抵金の力で自由になると思つて居るのに、現在自分の持物たる胃袋のみが自由にならないとは、人間の力の弱さに驚くねえアゝ昔の樣に腹が空りたい〳〵」

信　子「貴方子供みたいな事をおつ仰りますな、恰度千代萩の千松と反對ですのね……」

芳　村「さうだね、俺が千松で有ればお前は慥に伊達家の大忠臣だね」

信　子「さうですね、頭の禿げた千松は氣拔ですね」

芳　村「違ひなしだ」

二　人「アハゝゝゝ」

ト笑ふ、此の時下手より松下ツカ〳〵と出で來り、

松下「旦那礦山部の專務取締の金井さんがお見へになりました」

芳村「お、金井が來たか、之れへ通せ」

松下「ハイ」

ト元の處へはいる。

信子「金井さんは此頃此方らなんですか」

芳村「一週間程前から因の島へ派遣する醫者を迎ひに來て居るのだ」

信子「おやさうですか、因の島は九州の西の端ですから、都會の醫者は行くのを厭やがるでせうね」

芳村「夫れで何時も困るのだ、醫者を置いてやらないと、職工が可愛想だからね」

信子「全くですね、勞働者を保護するのは我々資本家の義務ですからね」

芳村「おや〳〵中々時代に徹底して居るね」

信子「皆貴方の御仕込ですわよ、おほゝゝゝ」

ト此の時金井武雄、稍々老けたる上品なる紳士の拵へ、後より醫學士山部清、洋服姿にて兩人いで來り、

金井「御主人、昨日は失禮いたしました」

芳村「さア〳〵上がり給へ〳〵」

金井「はア御免下さい」

ト山部を振り返り見て、

「サア先生何卒——」

山部「御免下さい」

ト宜しく捨白詞にて上にあがり、山部に椅子を與へる。

金井「イヨ——奥樣今日は」

信　子「怎うも暫らく……此方らへお歸りで御座いますのね、チットも知りませんでした」

金　井「はア一週間前に社用で歸りまして、社長には御目に掛つて居るのです、イヤモウ實に多忙を極めましてね、北の女が放さない、南の奴が泣いて留めるこいふ寸法で、仕事と女の兩軍を引受けて戰つて居るのですから堪りませんよ」

信　子「相變らず御盛んですのね」

金　井「全くですよ、タイムイズ・ネー而して女です、女と云へば奥樣老けましたね」

信　子「あら厭な金井さんだわ、老けましたねこの御挨拶は婦人の虚榮心をおびやかすのですよ」

芳　村「あはゝゝゝ之れが金井の宜い處だ、淡々として飾らない、嘘にも若く見へると言へば女が喜ぶのに、露骨に老けましたねへと來る處は君の生命だよ」

金　井「いや全く慥に老けましたねへ」

芳　村「君々さう駄目を押すなよ、之れも子供を産んでから減切り老けたよ」

金　井「成程坊チャンが出來た結果ですね、女は一人子を産めば五ッは老けると云ひますから、十人産めば一度に五十老ける譯ですねへ抑も〳〵……」

芳　村「君々、何んの用が有つて出て來たのだい」

金　井「イヤ――これは〳〵、實は九州へ行つて頂く此のドクトルを御紹介に參つたのです」

芳　村「それなら早く紹介して呉れなきや彼方も御迷惑ぢやないか、先きから一人ニヤ〳〵笑つて入らつしやるぢやないか、怎うも貴方濟みません」

山　部「イヤ怎う致しまして、金井さんは實に不可思議なる腦髓の持主で有ると、先刻から此處で研究して居るのです」

金　井「驚いたね、僕の腦髓を醫學上の研究材料にされて居るのは光榮だね、實は

ね……奥様お茶一杯下さいませんか、ア、しんど……」

信　子「あら氣が附きませんでした、只今直ぐに……貴方御免下さい」

ト山部に挨拶をして上手へはいる、金井は卓上に有る洋酒を呑む。

芳　村「君々、夫れは後にして此方らは豫て君から話の有つた山部ドクトルだね」

金　井「左樣々々、抑々山部氏の生國は……」

芳　村「君簡單に紹介して呉れ玉へ」

金　井「宜しい、夫れでは勉めて簡單に……醫學士山部清氏、出生岡山縣人、年齢三十八歳、無妻、月給一千圓、九州因の島囑託醫、今晩十時出帆、社長に挨拶紹介終りッ」

芳　村「中々簡單だね……」

ト山邊に向ひ、

「怎うか不自由な僻地ですから御承知の上で、多數の職工の爲怎うか宜しく御願ひ申します」

山　部「はい承知致しました、將來宜しく御引廻しを願ひます」

芳　村「イヤ御同前に……今晩十時に御立ちで御座いますか」

山　部「はいさう云ふ僻地に一人の醫者も居ないと云ふのは多數の勞働者の不案です、自己の天職の爲一刻も早く參りたいと存じます」

芳　村「有難う、貴方の樣な方が御出で下さるのは工夫の幸福です、社長たる私から厚く御禮申上げます」

金　井「怎うです、社長人格の高い事は蓋し偉大なものでせう、山部氏は掘出者で有る事は自己のプライトとして社長に提供します」

芳　村「掘出者とは失敬だね……先生妙な事を御伺ひしますが、人間の腹は空かないものでせうか」

山　部「腹が空かないとは？」

芳　村「實は私なんですが、最近少しも食が進みません、有らゆる治療も試みましたが更に効能が有りません、昔から胃は強い方ですが、其の昔勞働……否や老人ゝ云ふ程でも有りませんのに何でせうか、實際食慾を奪はれたゝ言ふのは物の悲哀を痛切に感じますね」

山　部「成程、能く上流階級の人達に聞く一種の悲哀です、要するに過激に腦力を使ふ割合に運動不足の結果ですなア、怎うです一ッ他の胃袋を借りて消化さして見ては……」

金　井「先生笑はしちや厭やですよ、隣の丼鉢でも借る樣に人の胃袋を借りて、食物を消化すなんて眞面目な顔をなすつて、洒落た事をおつ仰るねへ」

山　部「いや洒落でも冗談でも無いのです、最近佛蘭西で有名な學者が廿世紀の一大發見として斯界の大問題になつて居るのです」

芳　村「へえ……人の胃を借るゝは怎うなるのです」

山　部「つまり一種の心理作用催眠作用です、人間の精神力が、如何に偉大にして驚嘆すべき不可思議なる神秘的現象を表はすか試みに遣つて御覽なさい」

芳　村「怎う云ふ工合に遣るのでせう」

山　部「なに譯は無いです、假へば此の金井氏を我輩が催眠狀態にして、芳村氏の食べたものを君の胃で消化せよゝこの暗示を與へるのです、するゝ貴方は忽ちに空腹を感じていくらでも物を召し上つても貴方の御腹は少しも膨れない、金井君の胃が段々膨れて代理に消化して呉れるのです」

芳　村「科學の進歩に恐るべきものですね」

山　部「試みに遣つて見ませうか、金井君一寸御立ちなさい」

金　井「厭ですよ、冗談ぢやない、外の事ならいくらでも社長の代理はしますが、胃袋の代理なんか眞平だ、殊に我輩は胃腸が持病ですからねへ」

山　部「そりや不可ない、胃腸の頗る健全な人間でなけりや駄目ですからねへ」

芳　村「成程消化力の弱い人間ぢや駄目ですね、一ッ新聞にでも廣告をして胃の強い人間を募集するかね、幸に合格すれば社の重役待遇にして優待するがね」

金　井「重役待遇と云へば我輩と同格だ、甘い物で腹は膨れて重役待遇はボロイ話だ、役目の名前は何んと云ふのです」

芳　村「さア先づ代理消化課長とでも命名仕様かね……」

金　井「消化課長は振つて居ますね」

三　人「あはゝゝゝ」

ト笑ふ。此時下女お種上手より、ニッケル盆に紅茶を載せたるを二つ持ち來る。山部金井兩人の前に置く、

お　種「誠に遲くなりまして相濟みません」

金　井「これは有難う」

ト呑む、芳村はお種の姿をヂット見て居る。

お　種「旦那樣御飯は如何で御座ります」

芳　村「食べたくないッ」

お　種「はい……」

ト行きかけるを、

芳　村「おいお種一寸待て」

お　種「御用で御座りますか」

芳　村「變な事を聞くが、お前腹は空くか」

お　種「あら厭で御座りますわ、そりや人間ですからお腹も空きますわ」

芳　村「三度々々キチント飯を喰うねへ」

お　種「えゝ頂きます」

芳　村「ごの位ひ喰べる」

お　種「厭で御座りますわ、其麼に澤山頂きませんわ」

芳　村「でも胃腸は健全だらう」

お　種「いえ昨日から腸加答兒で弱つて居るので御座ります」

芳　村「落第……重役の資格なし、彼方へ行けッ」

お　種「おからかいなされましては厭やですよ」

ト上手へ這入る。

金　井「社長なか〳〵候補者が有りませんね」

芳　村「全くだ、各會社の專務課を命じる人物はいくらでも有るが、消化課長は中手に入らないね」

金　井「おや耳が痛いね、會社の專務は型無しですなア」

三　人「あは〻〻〻」

ト笑ひくづれる。此の時上手より手傳中山楠松極めて粗服にてツカ〳〵と出で來る。

中　山「日那一寸前栽の飛石の恰好見こくなはらんか」

芳　村「あッ喫驚した、お前何んだい」

中　山「へえ……庭を直しに來て居る手傳だす」

金　井「お前達がツカ〳〵こ恁麼處へ來るんぢやない、なぜ取次を願はんのぢや」

中　山「最前から何んぼ女子衆さんに云ふても、旦那はんが來こくなはらんのやがな、一寸見て貰らはんこ仕事が片附きまへんがな」

芳　村「よし〳〵直ぐ行くよ〳〵」

中　山「早う來こくなはれや」

ト言ひつゝ卓上の西洋菓子を、ヂロ〳〵欲しそふに眺める。

金　井「おい〳〵何をヂロ〳〵見て居るのだ」

中　山「えらい廿まそうなお菓子やなこ見惚れてますのや」

ト之にて芳村は中山をヂット見て思入、

芳　村「怎うだい一ッ食べないか」

中山「へイ大きに」

ト芳村はシュクリームを一ッ與へる、中山は一口に喰ふ。

芳村「なか〳〵胃は健全らしいねへ」

中山「阿呆らしい、恁麼物一ッやそこらで胃が健全も絲瓜もおますかいな、十や十五なら何んでもおまへんぜ」

芳村「羨しいね、毎日の食事は甘いか」

中山「へえ飯時を待兼ねますなア」

芳村「いくら程一日に喰べる」

中山「何んぼ喰べてもモウ宜いと思うた事はおまへんよつて、何んぼ喰べられるか一寸見當がつきまへんな」

芳村「酒は飲むか」

中山「へえ……あんまり飲めまへんな」

芳村「飲めんと云つて怎の位るだ」

中山「さア……まア二升だんな」

芳村「二升も飲めれば大したものぢや、フム……立派な體格だなア」

ト言ひつゝ中山の腹を試驗して、三人顔見合して思入れよろしく有る。

金井「ねえ君、今さうやつて手傳をして居つて一日幾何になるね」

中山「へえ先づ一日二圓五十錢だすな」

金井「怎うだい、手傳を止めて此の御邸へ勤めたら怎うだい」

中山「へえ……結構だすな、私等のさして貰う樣な仕事がおますかいな」

金井「立派な仕事が有るのだ、月給も先づ三百圓も遣りますがな」

芳村「なに君、五百圓でもいゝよ」

金井「怎うだ、五百圓、さうして重役待遇で、年に二回の配當が有るのだ」

中山「もし、せはしないのに嬲ッこくなはんな」

トプンとして元の處へ行きかける。

芳　村「おい〳〵君、待つて呉れ玉へ」

ト止めて、自分の傍へ引寄せ、

「眞面目だよ……眞面目の話なんだからさう怒るなよ」

中　山「イエ怒る譯やおまへんけれど、あの旦那の樣に月給五百圓やの、重役待遇やのと、阿呆らしくつて聞いて居られまへんがな」

芳　村『いや夫れが事實なんだ、まあ〳〵其處へ掛けて呉れ給へ」

ト長椅子に腰をかけさす。中山は腰をかけ、椅子の彈機で尻を持上げられて喫驚して立上がる。芳村は毛蒲團を椅子の上に敷き、無理に中山を腰掛さす。

中　山「何んぼ事實こおつ仰つても、本統に出來ますかいな、其日暮しの手傳が、其麼値打の有る仕事が出來ますかいな」

芳　村「それが立派な仕事が有るのだ、君でなければ出來ないのだ」

中　山「一體怎んな仕事をしますのやいな」

金　井「なに譯は無いのだ、代理消化課長と云ふ立派な仕事だ」

中　山「それは何んの事だすね」

芳　村「いや君には夫れでは判るまいが、つまり僕が喰べた物を君の胃袋で消化して貰らへば宜いのだ」

中　山「阿呆らしい貴方の喰べた物を私の腹で消化せますかいな」

ト又立ちかける中山を芳村は無理に止める、

山　部「いや生理學上、心理學上の結論として決して不思議な事ぢやないのぢや、社長の召し上つた物を我輩が引受けて君の胃で消化す自信が有るのだ。遣つて上げなさいよ」

中　山「貴方手品師かいな」

金　井「馬鹿云へ、之れは立派なドクトルだよ、決して苦しい事でも辛い仕事でも

ないのだ、消化代理部長を勤めて社長を助けて上げて呉れ玉へ、左すれば君は芳村家の重役として僕と同格の親友だ、イヤ手傳君……手傳君は可笑しいね、君は名前は何んと云ふのだ」

中　山「中山楠松と云ひます」

金　井「中山だね、ヤア――中山君、ヤア金井君二次會は何處に仕様なんて云ふ法で、轡を並べて花柳界へも乗り出さふぢやないか」

中　山「貴方の話は狐を馬に乗せた様で便りないなア」

芳　村「いや決して便り無くないのだ、怎うだ承知をして呉れないか、得心して呉れゝば僕は終生の恩人として君の一生はいくらでも贅澤な生活をさして上げる、兩親が有れば夫れも引受ける、妻子も共に面倒を見よふ、金で濟む事なら如何なる要求にも應じよふ。君の爲に立派な家を造つて、老後を樂にして上げる、此の通り眞面目に頼む〳〵」

中　山「其麼結構な話なら遣らして貰ひますが、命に別條はおまへんかいな」

トホロ〳〵と涙を落す、芳村は中山の涙をハンカチで拭いてやりながら、

芳　村「泣かいでもよい〳〵」

金　井「なに其麼心配は斷じて無い、只甘い物で君の腹が自然に脹れて、ブラ〳〵して居りや五百圓の月給取りサ」

中　山「そんならまあ、お間に合ふか合はんか知りまへんが、一ツ使ふて貰らいませうか」

芳　村「有り難い〳〵」

ト紙入より札束を取り出して、

「之れは甚だ失敬だが、芳村家の重役として入社して呉れた心祝だ、納めて置いて呉れ」

ト中山の手に札束を握らす、中山は其の金を見て嬉し涙を流しながら、

中山「へえ――まあ恁麼大金貰うても宜しいおまんのかいな」

金井「好いのだ〳〵、未だ夫れ丈けぢやない、君の收入は大したものだ」

中山「恁麼金を嗅に見せたら喫驚するやらう、有難う御座ります〳〵」

芳村「それでは先生、一ッ暗示を願ひませう」

山部「はい遣つて見ませう」

ト中山を見て、

「君、中山君一寸……」

中山「中山君なんて可笑しいな……」

金井「なに可笑しい事は無いよ、芳村家の消化課長、我輩と同格の重役だ、何んですかと威張つて行り給へ」

中山「えらい面白いな……ア、何んですか」

ト氣取りて威張りながら下手へ來る。

山部「さアこゝへお掛けなさい」

ト捨白詞にて下手の椅子に掛けさす、靜に兩眼を摩ぜて催眠狀態になし、耳の傍にて暗示を與へ、後手を打つて目を覺さす、中山はあたりをキョロ〳〵と見て、

中山「もし、變な事しなはんなや」

山部「なに大丈夫、モウ重役の資格が出來たよ、社長御芽出度う……」

芳村「先生大丈夫でせうか」

山部「大丈夫、心理學上神秘的な現象は直覺的に現はれて、今に貴方は空腹を感じられます」

芳村「さうおつ仰ると妙に腹が空いた感じです、エーイッ……」

金井「こりや妙だ、二十世紀の科學の進歩は、何處迄進むか知れませんねへ……何んか召し上りますか、炊事場の方へ命じませうか」

芳村「君、それまで待てんよ、ア、腹が空いて來た……失敬するよ」

ト傍のシユークリムを續けて四五個喰ひながら、

「コリヤ甘い〳〵、いつも恁麼物は一つも厭やだが、なんぼでも喰へる、喰つても更に胸に支へなへ。ア、甘い〳〵」

金井「いや結構〳〵……おい中山君……君は何んこも無いかい」

中山「何んぢや知らんが胸脹れがして來たぞ」

金井「それで愈〻君が今日から五百圓の月給取だ」

中山「恁麼事で月給貰らへれば有難いなア」

芳村「有難いのは君より僕だ」

ト金井に向ひ、

「おい君ウイスキーを一杯呉れ給へ」

金井「ウイスキーは珍らしいですなア」

芳村「何んだか妙に呑み度くなつたよ」

トウイスキーを金井は注ぐ、芳村は夫れをグツト呑み干す、同時に中山は酒を呑んだる科にて、

中山「ゲーブウ……大分、きつい酒やな」

芳村「僕は更に感じない、金井君、此の大きな銀コツプに注いで呉れ給へ」

ト大の銀コツプに注がして一息に呑む。中山は酒の廻りし科、

中山「ゲーブ……ア、顔がカツ〳〵して來たがな」

ト此の樣子を見ながら、三人は捨白詞にて芳村は盛んにウイスキーを呑む。三四杯目位に中山は醉ふたる科にて、

中山「ゲツープ——醉て來たぞ」

トヒヨロ〳〵しながら卓の處へ來り、

「一寸莨一本貰いますぜ」

ト早や舌も廻らぬ科にて卓上の卷莨を取け、鱗寸を摺らんとするが目が据わつて摺れ

ぬ科にて元の椅子へ掛ながら、

中山「おいそこの兄弟ッ」

金井「兄弟こは誰ぢや」

中山「お前ぢやないかへ」

金井「おや兄弟こは驚いたねへ、何か用か」

中山「用かこ聞かずに此處へ來い」

金井「ホイ〳〵」

芳村「君、濟ないが賴むよ」

金井「まア同僚なら仕方がないね」

ト云ひながら中山の傍へ來て、

「ハイ何か御用ですか」

中山「此の燐寸摺つて莨へ火をつけてくれい」

金井「おや〳〵加介な同僚だね」

中山「文句言ふない」

金井「ハイ〳〵」

ト宜しく捨白詞にて火をつけて渡す、

山部「社長、貴下は感じが有りますか」

芳村「いくら呑んでも更に醉ひません、之れならいくら宴會で呑んでも大丈夫です」

山部「德義上餘んまり胃の惡くなる樣なものは控へて遣つて下さい」

芳村「はい謹んで食事上の德義は守ります」

中山「守るも守らんも有るかい、ナア兄貴」

金井「兄貴は恐れ入つたなア」

中山「何が恐入つたのぢや、俺は酒呑んでも無理は云はんぞ、無理と思うなら誰

にでも聞いて貰らへ、あんぽんたんめが」

金　井「大分酒が悪ひねえ」

中　山「誰れが酒が悪いのぢや、之れ丈け位ひ酔ふ俺ぢやないわへ」

山　部「あゝ其うだ〳〵、酔うては居らん〳〵、なか〳〵しつかりして居るね……」

中　山「それに此奴が酒が悪いと吐す、あやまれッ」

金　井「イヤ失敬〳〵」

中　山「さう謝つて呉れると嬉しいナ、仲直りに一ッ手を叩いて散財しやう」

金　井「厭だよ〳〵、僕は素面だよ」

中　山「何んで厭やぢやい」

芳　村「君々、逆はずに手を叩いて遣つて呉れ玉へ」

金　井「ハイ〳〵……ア…コリヤ〳〵」

ト手を厭や〳〵ながら叩く、中山は嬉し相に手を叩きながら、

中　山「あゝコリヤ〳〵、都々逸あ野暮でも……オイ後を唄はんかへ」

金　井「こりや實際泣きたくなるよ」

芳　村「君さう云はずに唄つて遣つて呉れ給へ」

中　山「貴樣怎うしても唄はんと言ふかッ」

と傍へ血相變へて行く、

金　井「唄ふよ〳〵……都々逸あ野暮でもやりくりや上手……」

と情なき顏をして唄ふ、中山も喜び、

中　山「あゝコリヤ〳〵、甘まい〳〵」

と拍子を取りながら浮れる、此の途端に下手より三太夫ツカ〳〵と出來り、此の樣子を見て驚き、

三太夫「何んぢや〳〵、何事で御座ります」

と云ふ三太夫の手を中山は捕つて、

中　山「何んでもよい、踊れ〳〵」

三太夫「コリヤ貴様は出入の手傳ぢやないかい、旦那の前で酒に醉ふて何んと云ふ様ぢや」

芳　村「三太夫〳〵、叱つてやるな、俺が許し、醉はしたのだ、逆らつて遣つて呉れるな〳〵」

三太夫「ヘエ……旦那が御許しで御座りまするのか、何んと云ふ幸福な奴です」

中　山「幸福も絲瓜も有るかい、サアお爺一ッ踊れ」

三太夫「コラッ！　馬鹿にすると承知せんぞ」

芳　村「これ〳〵、さう云ふて遣るな、踊れと言へば踊つてやれ」

三太夫「阿呆らしい、醉つぱらいの手傳相手に踊れますかいなア」

金　井「おい三太夫、踊つて遣つて呉れ給へ、さうして僕を助けて呉れ玉へ」

三太夫「何んで恁麼物にそないにつとめんなりまへんのや」

芳　村「其の男につとめるのぢやない、俺につとめるのぢや、主人の命令だ踊つてやれ」

中　山「厭やと吐かしたら張り仆すぞ」

金　井「おい〳〵酒が悪いのだから早く踊れ〳〵」

トこれにて三太夫はよんどころなく〳〵、

三太夫「あゝコリヤ〳〵」

ト踊る。

中　山「甘い〳〵、あゝコリヤ〳〵」

二　人「あゝコリヤノ〳〵、チヨイト〳〵」

と踊る、中山は三太夫と共に大聲にて好みの唄をうたいながら上手へ來り、長椅子につまづきし科にて其の上に仆れ、其の儘寢て仕舞ふ。

芳　村「はッは〳〵餘程廻つたらしいなア」

山　部「暫く此の儘安眠をさしてやる方がいゝでせう」

芳　村「さうですね……おい三太夫、其の人を離れの寢室へソット御連れして寢かして呉れ」

三太夫「離れの寢室ではあの御客樣の室で御座りますか」

芳　村「さうだ」

三太夫「あんな立派な處へ、恁麼者を寢さしまするのか」

金　井「おい恁麼者とは何にを言ふのだ、此の男は今から僕と同格の芳村家の重役だよ」

三大夫「何んで恁麼者が重役で御座りますのぢや」

芳　村「何んでもよい、後で判るよ、サア靜に起して御供なして行け」

ト之にて三太夫は不思議の思入にてグタ〳〵になつて居る中山を起し、

三太夫「おい起きなさい」

金　井「おい重役に對して其麼失禮な態度が有るか」

ト中山の傍へ來りて、

「さア中山さん、お起きなさい〳〵、彼方らの寢室へ參りませう」

ト捨白詞にて金井、三太夫の肩にすがりて中山は立上る。

中　山「おい水や〳〵、水呉れ」

金　井「宜しい〳〵、夫れぢや僕も一緒に送つてやりませう」

芳　村「御苦勞だね」

山　部「我輩も一緒に行つて頓服でも與へて、酒の醉を覺ましてやりませう」

芳　村「怎うも御迷惑で御座いますねへ」

金　井「さア〳〵君しつかりしたまへ、おや〳〵大變な親友が出來たねへ」

ト皆々よろしく捨白詞にて中山を介抱しながら三太夫と共に金井は上手奥へはいる。

後より山部も連いてはいる。此の少し以前より上手二重カーテンの影に、信子は此の

様子を見て居る。芳村は一同の這入りし後を見送りて思入あつて、

芳　村「あゝ怖ろしい科學の發達だ、二十世紀の文明は果して何處まで進歩するか自由にならないと思つた自分の胃も遂に學術の力で征服した、人は弱者に同情するが、神は強者の味方をする、健全な肉體を武器として活動するのは人類の天職だ、さうして國民の義務だ……愉快だ〳〵あはゝゝゝ」

ト此の時信子ばズット前に來り、

信　子「旦那樣、大變な勢で御座りますな」

芳　村「おい信子、喜んで呉れ、腹が空いて來たぞ」

信　子「結構で御座りますね、一寸後で聞きましたが、學問の力程恐ろしいものは御座いませんねへ」

芳　村「おや其れぢや皆聞いたか」

信　子「はい立聞きは卑怯者のする事だと何時も貴方がおつ仰いますが、餘まり賑

かですし、大きな聲で都々逸か聞へましたものですから、はてなと思つて此處まで參りましたら、あの樣子でせう、立聞もしたくなるぢや有りませんか」

芳　村「おゝさうか、之れからお前も安心して呉れ、昔の通りいくらでも飯を食ふぞ」

信　子「嬉しう御座いますわねへ、いくら召上がつても今の人の胃で消化して呉れるのですわねへ」

芳　村「消化課長の中山君が俺の代理をして呉れるのだ」

信　子「左樣で御座いますね、此處迄科學が進歩したのですから、婦人の姙娠の代理も出來そうなものですなア」

芳　村「姙娠の代理とは何んだ」

信　子「變な事を申上げる樣ですが、美は女の生命でせう、其の美を傷附けるのは出產ですわ、既に今の坊やが產れた爲に、私の老けた事御覽なさい、金井さんだ

つてア、言いましたわ・あの時私は、あゝ情け無いと思ひましたの、それでも姙娠は女の天職、之れを嫌ふと云ふ事は女の道ちや有りますまい、其處で私の考へは喰べる物さへ他人の胃で消化せるのですもの、姙娠だつて人のお腹を借りられない事は無いと思ひますわ」

芳　村「成程、之れはお前の一大發見だね、或は其の結果になるか知れないねへ」

信　子「さうなれば怎麼に嬉しいかと思ひますわ」

芳　村「全くだね、其の美しい顔を衰へさせると云ふ事は、お前より俺が辛いからね」

信　子「まア極りの悪い厭ですわ」

ト恥しき顔をする。

芳　村「あはは、、、」

ト笑ふ、此の時上手よりお八重ニツケル盆に紅茶を載せて出で來り、芳村の前へズー

ト出して、

お八重「旦那樣紅茶で御座ります」

芳　村「あゝよし……」

ト其の紅茶を取りながら、お八重をヂツト見て、

「ねえ信子今の問題ねへ、怎うだらう」

ト お八重を眼で知らす、

信　子「夫れならば宜いでせうね」

芳　村「遣つて見ようか」

信　子「えゝ研究的にねへ」

芳　村「よし……おい、八重一寸來い」

お八重「はい」

ト芳村の傍へ寄るを芳村眞面目な顏をして・ドクトルの眞似をして暗示を與へる思入

？

れ、ハツト手を打つを暗轉の知らせ、之れにてターグチエンヂになる（赤電燈にて暗轉の内に五ケ月後と記したるを見せる事）

(2) 同家奥庭の場

本舞臺平舞臺、向ふ一面大庭園の背景。中央に風雅なる東家を設け、其の下手に泉水有り。天使の人形は噴水の中に赤青の電燈を提げて居る、下手上手共に西洋花の花壇を見せ、上手に坂有り其坂より奥へ通じる路有る。所々に樹木上品なる瀬戸の腰掛五個、東家の中は三脚の藤椅子、總て富豪の贅澤なる庭園の場面にて、電燈な

ト暗の内より宴會の心にて、太鼓地越後獅子の囃子になる、老いたる紳士は禮裝にて目隱を赤き手拭にてなし、鬼になりて各來賓の新田、林、長谷邊、山名、藝妓玉龍、房枝、とん龍の一同を追ひ廻して鬼ごつこをなし、皆々賑かに騒ぎ居る、宜き處へ上

手より三太夫紋付羽織袴にてツカ〳〵と出で來る、と豐部は三太夫を捕へて、

豐　部「さア〳〵捕へた〳〵」

三太夫「もし〳〵私で御座ります〳〵」

一　同「違つた〳〵」

ト眼隱を取る。

豐　部「イヨ……三太夫君か、失敬〳〵、今日は非常な待遇しで來賓一同大喜び、御主人に宜しく云つて呉れ給へ」

三太夫「いやもう何んのお待遇も御座いません……只今恰度餘興が初まつて居ります」

豐　部「おゝ諸君、餘興が初じまつて居るこ〳〵」

一　同「夫れぢや見に行こう、三太夫君御主人に宜しく」

ト各自口々に挨拶をして、藝妓の手を取りながら一同賑かに下手へはいる、同時に上

？

手より禮裝の來賓山本、吉田の兩人いで來る。

三太夫「おゝ吉田さん、山本さん、今日はようこそ」

山本「おゝ三太夫君か、非常に今日は愉快でしたよ……」

吉田「御主人に宜しく云つて呉れ給へ」

三太夫「何んの風情も御座りませぬ、今彼方で餘興が初まつて居ります」

山本「いや餘興も結構ですが、有名な庭園を吉田君の案内で見せて貰らツて居るのです」

三太夫「それは〳〵、何卒御緩りと……」

吉田「御主人に宜しく云ふて呉れ給へ……」

三太夫「はい承知致しました」

ト三太夫は下手へはいる、兩人は庭園を眺めながら。

山本「君、僕は見るのは初めてだが、成る程噂通り贅澤な庭だなあ」

吉田「何んしろ當市では有名な庭だからね、其處へ主人の芳村君が趣味が有るから行屆いたものだよ」

山本「尤も此處の主人位金が儲かれば怎麼事でも遣れるね」

吉田「實際遣手だよ、芳村一雄君と言へば實業界の飛將軍だよ、詰り頭が宜いのだね」

ト此の少し以前より中山禮裝にて以前に變る口髭の立派なる紳士の拵へ、顏色青く衰弱なしたる體にて、洋杖を杖につき下手より出で、兩人の話を聞き居り、此の時前へツト進み出で、

甲山「然りッ」

ト突然に大聲にて云ふ、

吉田「アッ喫驚いた何誰ですか」

中山「我輩です」

ト之れにて吉田は中山を見て、山本を退け傍へ行き、

吉田「いよう之れは〳〵中山さんですか、其後は誠に御無沙汰を致しまして申譯も御座いません」

中山「此の頃はチットも來ませんね、チットお遊びにお出でなさい」

吉田「はい有難う御座います、今日は又御主人の祝賀會の御招待に預りまして、非常なる御優待で宜しくお傳へ下さい」

中山「いま何んの用意もなく却つて御迷惑ですなァ」

山本「君、彼方らは」

吉田「おや君はまだ知らないか、此方らは御當家の重役で中山楠松さんこおつ仰るのだよ」

山本「おゝ夫れは〳〵」

ト傍へ行き名刺を出して、

「自分はかう云ふ者です、將來よろしく」

ト名刺を渡す、中山は横柄に受取つて自分の名刺を渡す、

中山「あゝさうですか、自分はかう云ふ者です」

山本「有難う御座います」

ト名刺を見て、

「芳村本邸詰重役消化課長……ねえ吉田君、消化課長こおつ仰るこ何會社だ」

吉田「夫れはね……」

ト中山に氣を兼ねて、

「……大變な御役目で……後に君に云ふて上げる、つまり重役の上席だ」

山本「へエンあの方が重役の上席こは……つまり頭が宜いのだなァ……」

中山「頭ぢや有りまへん、腹が良いのです」

吉田「あはは〳〵〳〵失敬します」

ト誂への囃子にて中山は上手へ行く。山本は不満らしく中山を見て小首をかたげるを吉田は山本を引張る様にしてはいる、同時に上手より三太夫いで來り、

三太夫「おゝ中山さん御散歩ですかな」

中　山「もう運動より外に何にも用が無いから、朝から晩まで庭斗り歩いて居るのぢや」

三太夫「然し中山はん、大概偉いやらふなア」

中　山「もう〳〵今では昔の方が樂やで……」

ト元の土方口調で云ふ、

「もう旦那は此の頃喰ふの喰はんので、何んぼ私の樣な丈夫の腹でも明けても暮れても一杯で、其處へ酒はグウ〳〵と呑むわ、今では一遍昔の腹の空いた氣になりたいと思ふ、あゝ人間の出世も宜い加減のものゝで」

三太夫「其の代り月千圓の月給で、其の上家は建て貰うし重役待遇にして貰ふて、金の時計に羽二重の羽織やがな」

中　山「いやもう金の時計も何にも入らん、今では昔の手傳が戀しい、此の調子で一年も居たら迚ても命が續かんわいな」

三太夫「まあ〳〵命有つての物種ぢや、體を大事にしなされや」

中　山「有難う……ケッブ――、あゝ又旦那がウイスキー呑んでるがな」

ト誂への囃子になり、中山は千鳥足にて上手へ、三太夫は氣の毒な思入にて下手へはいる、同時に東家の後よりお八重以前に替りし服裝にてスウーツと出て、前後を見廻し、思案に耽ける思入れ、宜き處へ信子上手より禮裝にてツカ〳〵と出で來り、

信　子「其處に居るのは誰れだい」

お八重「はい私で御座ります」

信　子「おゝ八重ぢやないか、泉水の傍で何にを考へて居るのだへ」

お八重「はい少し心配が御座りまして、思案に盡きて居りまする」

信　子「怎麼心配か知らないが、泉水の水を見詰めて涙ぐんで居るなんか不氣味だよ、一體怎麼心配が有るの……」

お八重「はい夫れが誰にも申上げられない恥しい事で御座りますので……」

信　子「恥しいとは怎麼心配だえ、マア言ふて御覽んよ、目を掛けて使つて居るお前だもの、話に依れば相談にも乘つて上げるから言うて御覽よ」

お八重「奥樣何卒人樣に云ふて頂きませんようになア」

信　子「誰れにも云やしないよ、怎うしたの」

八　重「恥しい事で御座りますが、私は只だならぬ體になつて居ります」

信　子「えッ只だならん體とは、姙娠ぢやないか」

お八重「ヒエッ、奥樣其麼事が御判りになりますか」

信　子「いえ……あの……別に判ると云ふ譯ぢやないが、さうぢやないかと思つたの」

お八重「奥樣恥しながらさうで御座りますので」

信　子「ヒエッ――そして相手は誰れなの」

お八重「さア其の相手がおます位ゐなら、之れ程心配も致しまへんけれども、相手は元より御奉公中に其麼戯をした覺へも御座りませず、あんまり不思議で御座りますゆへ、昨日御醫者に見て貰いましたら、慥にさうぢやもう五ッ月と云はれました時は……」

ト泣く、

信　子「よし〳〵、心配せいでもよい〳〵、なぜモット早ふ云はないのだへ、五ッ月迄なつて居ながら私が心配するぢやないか、決して體も不養生せぬ樣に、子供が出來たら内の子にする、お前は一生私が引受けて決して苦勞はさゝぬ、お八重有難ふ、よう姙娠して呉れたね、此の通り兩手をついてお禮を云ひます」

お八重「奥さん何んで其麼御禮を仰るので御座ります」

信　子「詳しい事は何れ話もしてお前にも安心さす、不取敢旦那様にも申上げて喜んで貰らいたい、一寸此處に待つておいでよ、旦那さんを呼んで來るから」

ト立上る。此の以前より芳村同じく禮裝にて上手より出で、ヂット話を聞いて居る、此の時進み出で、

芳　村「いや先きから此處で聞いて居た」

信　子「おや旦那、お聞きに成りましたか」

芳　村「實に科學の力の偉大さは、慥に人間業以上だねえ」

信　子「貴方、感心して入らつしやる手間で、お八重に御苦勞だつたと禮を言つて遣つて下さいよ」

芳　村「おゝさうだね……おいお八重、姙娠したと云ふのぢやないか」

ト之れにてお八重は恥かしげに隱れる。

「成程一寸お腹が飛んで出て居るねへ」

信　子「貴方もう五ツ月ですゞサ」

芳　村「おや〳〵、それは大變だね、それでは多少の用意も必要だね……」

信　子「さうですとも、何んだか私は氣がいそ〳〵して來ましたわ、取りあへず三越へ初着の注文もしなけりやなりませんから、一寸電話を掛けて參ります」

ト行きかけて小戻して、

「これお八重、其麼處で冷へては大變だから早く部家へ歸つて暖たかくしておくれ、直ぐに私が行つて上げるからね……チョット貴方行つて參りますから、貴方彼女を部屋へ送つて遣つて下さいよ……何んだか急に忙しくなつて來ましたわ」

ト狼狽てふためき上手へはいる、芳村は後を見送つて宜しく思入れ、お八重を手招きする、お八重は恥しそふに傍へ寄る。

芳　村「おい我國の科學も進歩したねへ」

ト手を取らんとするを振拂ひ、

お八重「奥様に聞へますがな」

ト顔を隱して笑ふ、双方宜しく氣味合、宴會の賑かなる囃子に連れて此の模樣靜に木なしにて。

滿來

小三
德兵衛　吾妻草紙

【三場】

(一) 江戸兩國船宿武藏屋の場
(二) 大阪市岡新田田植の場
(三) 同村外れ茶店の場

登場人名

百姓　徳兵衛　五郎　【俳優】
親父　徳右衛門　蝶六
藝妓　小さん　大磯二郎
武藏屋　源兵衛　小蝶七
百姓　七兵衛　林時
武藏屋女房　お時　蝶三郎
川岸の　佐六

番頭　幸助　笑將
按摩　徳の市　五郎丸
田舍武士　近藤　五鶴
大工　久書　壽
百姓　權兵衛　五樂
百姓娘　啞のお花　花菱
同子守娘　お松　蝶の丸
茶店の婆　おくら　蝶八
田植男　壽
同　五鶴
同　五郎丸
同　五六

同　時丸
田植の女　蝶太郎
同　小時
同　胡蝶
同　林蝶
川岸の親分　清兵衛
同　若者　致雄　六　一郎
同　鯛　六　一雄
問　鰻　七　勢蝶
同　蟹　八　長佐久
同　海老
同　蜻蛉
女　お藏　三　保亀鶴
非人

(1) 江戸兩國船宿武藏屋の場

本舞臺平舞臺、下手船宿武藏屋の表口、向ふ正面は隅田川を隔て向ふ川岸を見たる背景、上手兩國橋の掛橋を出し、中央に床几を出し、柳の大木の側に立札あり、「河開き」と記しある、武藏屋入口の傍に手桶に水を入れ、柄杓をつけてある、跳への囃子にて幕開く、

ト中央床几に藝妓小さん、酒に醉ひたる體、醉醒しに風に吹かれて居る、上手より大工久吉は手に大工道具を提げていで來り、小三の後姿に見惚れながら花道へ行く、同時に揚幕より田舍武士近藤いで來り、七三にて突當る、

近藤「無禮者めッ」

ト大工は無言にて、小腰をかゞめて斷りをなして這入る、田舍武士は本舞臺へ來り、小さんの後姿を見惚れながら上手の方へ行く、同時に上手より按摩德の市來りて兩人突當る、

徳の市「氣をつけ……」

ト田舍武士は無言にて頭を下げて、上手へ這入る、按摩徳の市も下手へはいる、女房お時内よりいで來り、小三の姿を見て、

お時「お〻小さんさん、之れに居たのかへ、奥のお客が八ケま敷い故、傍へ行つて上げて下さんせ」

小三「私は無理にお酒を強ゐられて、餘り辛さの醉ひ醒し」

お時「其麼氣樂な事を言はず、早う行て上げて下さんせ」

ト小三の手を取つて、無理に内へはいる、同時に上手にて大勢の聲にて「サアサ參りませふ〳〵」此の聲と共に徳兵衛先に川岸の清兵衛・若者大勢に送られていで來る、（徳兵衛は旅裝）

徳兵衛「へイ〳〵もう結構で御座ります」

ト下手へ來りて、

「親方さん始め、皆の衆、何卒お歸り下されませ……」

清兵衛「何も其の樣に遠慮する事は無い、然し何處迄送つても名殘は盡きねへ、之れで別れと仕樣、だが大阪と云へば餘程の道のり、隨分體を大事にして、國へ着いたら早速便よりを聞して呉れい」

徳兵衛「へイ〳〵有難ふ御座ります、皆樣のお影で漸々望みが叶ひました、西も東も知らぬ田舍者を、よう御親切に今日まで、御面倒を見て下さりました、御恩は一生忘れは致しませぬ」

清兵衛「イヤ〳〵それと云ふのも皆孝行の徳、江戸へ出て來て三年此の方、只の一度も家を明けた事はなく、一生懸命稼ぎ上げたお蔭で、大枚の金をため、國へ歸つて親の家をばため直さうと云ふ、何んと美しい心掛けだらう、皆の奴等も少しは徳兵衛を見習へよ……シテ百兩の金は持つて居るか」

徳兵衛「へイ内懷へ入れて、シツカリ持つて居りまする

源兵衛「東海道は長の道中、殊に悪い奴も居る、昔から譬の通り人を見たら盗人、火を見れば火事だと思へよ、泊り〳〵の旅籠屋も、朝は早う立ち宵泊り、隨分共に氣を附けて行きなさいよ」

徳兵衛「何からなにまで有難う御座ります、其のお言葉を忘れずに、人を見たら何誰に限らず盗人ぢやと心得て居ります」

清兵衛「さうだ〳〵、併し昨日迄忠實に働ひて呉れたお前に、別れにやならねえとは思へば、何だか兄弟にでも死別れる樣で心細くなつて來た……噫々名殘が惜しいな」

徳兵衛「私も何んとのふ悲しうなつて參りました」

ト涙を拭きながら一寸氣を變へて、

「ア、鶴龜々々、涙は不吉で御座ります……」

清兵衛「ほんにこいつは俺が惡るかつた、ジャ何時迄居つても名殘は盡きねへ、モウ歸ると仕よう」

ト若い者に向ひ、

「ヤイ〳〵皆の奴も、威勢好く暇乞をしてやれよ……」

幸助「徳兵衛達者で暮せよ……」

ト泣く、

清兵衛「ヤイ〳〵徳兵衛が目出度い門出ぢや、何を泣くんだい」

幸助「親分だつて涙ぐんでるぢやねへか」

清兵衛「違ひなしだ、ヂャ徳兵衛無事に往きなよ」

徳兵衛「ヘイ〳〵有難う御座ります」

ト各自捨白詞にて暇乞をして、親分先に一同は上手へはいる、徳兵衛は後を見送りて

「ア、嬉しいな〳〵、親方始め皆さんなり、御親切にハイ〳〵厚ふ御禮を申ますると」

ト一同の跡を見送りながら、心から禮を云ふ、此の時武藏屋の内より亭主源兵衛いで來りて、

源兵衛「おい其處に居るのは德兵衛さんぢやないか」

德兵衛「おゝ親方、今日は……」

源兵衛「見れば旅拵へで、何處行きぢや」

德兵衛「ハイ親方さん、貴方樣にも永々こ御厄介になりましたが、只今から國へ歸らうこ存じまして」

源兵衛「ナニ國へ歸る……怎ふ云ふ譯で歸るのか知らぬが、折角馴染になつた者、江戸の人にならんせ、及ばずながら又力にもなるから」

德兵衛「ハイ御親切に有難う御座りますが、皆樣のお情けで、ヤット自分の思ひも遂げられましたので、國の親父にも早う安心させたいこ、主人から暇を頂き之れから上方へ歸りますので」

源兵衛「お前は上方かへ、怎うも俺もふだんからさうこは思ふて居た、シテ親御が有るのかへ……」

德兵衛「ハイ私の親は大阪在の水呑百姓で御座ります、恰度四年前、私の方はえらい不作で御座りましてなあ、年貢に困り、すんでの事に水牢に往かねばならぬ所を、先祖から傳はつた少しばかりの田地を抵當に、怎うやら怎うやら助かりましたが、それからこ云ふものは、明けても暮れても御先祖樣から傳はつた田地をば俺の代になつて人手に渡しては濟まぬ〳〵こ、二た言目には其ればかり、私も傍で聞く辛さ、責めて怎うこかしてこ思ひましても田舍の事……フト思ひついたは此のお江戸、將軍樣のお膝元、米一升土一升こ噂に聞いて居りました、一層の事に飛び出して、一生懸命働ひたら、少しのお金も出來ようかこ、三年前に親父こ水盃をして此のお江戸へ參りました、幸ひ川岸の親方のお世話に成つて、今日迄に貴方大枚百兩……貴方はん大丈夫で御座りますな」

源兵衛「何んぢやい……」

德兵衛「人を見たら盜人と思へとやら」

源兵衛「冗談ぢやねえぜ」

德兵衛「えへ……あゝ一心に稼いだお蔭で、百兩と云ふお金を貯め、ヤツと望みも叶ひまして、故郷へ錦を飾らうと、今船の出るのを待たして貰うて居ります處で御座ります」

源兵衛「ふむ、其麼譯で國へ歸るのか、然し聞いて見れば感心な孝行者だ、正直者で能く稼ぐ、今時の若い者には珍らしいと、何時も家内と話して居たのだ、長の馴染だ、殊更其麼目出度い事なら、頭のついたもので一杯祝ふて上げるから、船の出る迄緩り呑んで行くがいゝや」

德兵衛「有難う御座りますが、國を出る時、望みの叶ふまではと御酒は御祖師樣へ絶つて御座りまする」

源兵衛「お前はなか〳〵信心者だな、お前も御祖師樣を御信心か、俺も人に笑はれる程の固た法華、望みの叶つて居る事だし、國へ歸りがけ一杯や二杯何んの兎や角言ふものか、お祖師樣は其麼野暮ぢやねえよ」

德兵衛「まるでお友達の樣で御座りますなア」

源兵衛「これも信心の德だと、南無妙法蓮華經〳〵〳〵」

ト下手の内へ這入る

德兵衛「何時に變らぬ、武藏屋の親方は親切な方だ」

ト邊を見、制札を見て、

「今年も今日は河開き、見事なことぢやなア、せめて國の親父さんに、恁麼景色を見せて遣りたいなア、江戸の錦繪は土産に買うてあれど、此の景色を持つて歸る譯には行かず、ア、一度親父さんに見せてやりたいな」

ト川向ひを眺め居る、此の時武藏屋の中より藝妓小三千鳥足にて出で來り、德兵衛に

突き當り、其の儘醉潰れて中央に座す、

徳兵衛「アッ喫驚した、何んぢやいな、背中に暖いものが當つたと思ふたら貴下だすか」

小　三「ア……ツイ苦しさに目も見えず、飛んだ失禮をいたしました」

徳兵衛「怎う致しまして、私は構ひませんが貴方はん其塵處へ座つたら、衣物が汚れますぜ」

小　三「いゝのよ、構わない事よ……ア、苦しい」

ト胸を押へる、

徳兵衛「苦しい……貴方はん病人さんだすか、えらいお惡い事で御座りますなア」

小　三「私が惡るけりや殺してお呉れ、怎うせ病ひに取られる命さ……ねえ」

徳兵衛「えらい短氣な病人さんだすな、貴方そないな處に座りなはつたら毒だすぜ、早う彼方へ行て寢ねしなはれ、川風はお身に毒と云ひますでなア」

小　三「アラ有難いわねへ……實意が有るのねへ、一寸兄さん、誠に相濟みませんが水を一杯頂戴な……」

徳兵衛「水だすか……えらい掛合せだすな……ヘイ〳〵畏りました」

ト入口の傍の手桶の水を柄杓に入れてソツト持ち來りて、

「ヘイお水……」

ト傍へ行き、一寸顏をそむけながら、

「おゝ臭さ、酒に醉うて居なはるのか、わたいは又病人さんかと思ひましたえらい間違ひ、貴方餘り飲みなはるさかい、そないに苦しい思ひをせんなりまへんのや、一遍口の中へ手を突き込んで、ガアと吐きなはれ、宜い心持ちに成りますぜ……サアお水……」

ト水を出す、小三は其の手を取つて顏を眺める、一寸兩人氣味合にて小三は水を呑む

小　三「おや嬉しいのねへ、馬鹿に實意が有るわねへ、オヤ厭やですよ、笑つて居

なさるの、其麼に笑つちや恥しいぢや有りませんか、知らぬお方に飛んだ厄介を掛けました、私は柳橋で小三と云ふ藝者よ、恁麼だらしの無い裝り振りをして居る事を人に云ふのは眞平ですよ」

ト宜しく艶めかしく立上り、武藏屋の入口にはいる、德兵衛は跡を見送りながら、

德兵衛「生れて始めて德兵衛が、あんなお方に手を握られ、莞爾り笑ふた、わてやかさせめて男に生れたら、あんなお方と一度でも……金も命も入らんなァ……」

ト懷中の胴卷に手をかけて、

「何に金さへ有れば……」

ト誂への唄に連れて金の封を切り、縞の財布に入れる。此の時源兵衛は膳の上に有合

源兵衛「サア〳〵德兵衛さん、祝つて呑んで行きなされ」

德兵衛「源兵衛さん、折角のお志頂きます……」

ト膳の上の茶碗に手をかけ、

「源兵衛はん、一杯注ひごくなはれ」

源兵衛「オツトシヨ――」

ト銚子の酒を茶碗に注ぐ、其れを德兵衛一息に呑み干して、

「源兵衛はん、貴方、私が先前から云ふた事を、ほんまに受けて居なはるなア……私な、大阪在の大百姓の一人息子……」

源兵衛「えツー」

德兵衛「實の處は四五年前、親の身代あてにして、遣ふた〳〵湯水の樣な金遣ひ、それが爲にこう〳〵勘當同然、あの川岸の淸兵衛に預けられ、表向きは奉公人、私も惡いこ氣が附いてそれからは生れ變つた德兵衛こ、死んだ氣になり働いたら其處が親子で憎ふて勘當した譯ぢやなし、心さへ直つたらこ、今度勘當が許りて國へ歸るのや、お江戸の勝手も判つたし、之れから度々出掛けて來ます、こなさ

んの家も、贔屓にしますぞや……さアこれは私のほんの志、取つといて」

ト黄判一枚取り出して、源兵衛に渡す、源兵衛は捨白詞にて、今迄知らぬ事とて種々詫をする、

德兵衛「お前の内へ柳橋の小三と云ふ藝者が來て居るであらう」

源兵衛「へイ〳〵道はお金を使ふた若旦那、お目の附け處が違ひますなア」

德兵衛「其の小三を俺に取り持つて呉れんか」

源兵衛「あの小三を……ありや柳橋でも男嫌ひと評判の藝者、コイツア一寸……」

ト腕組をする、德兵衛は財布を叩いて、

德兵衛「おい源兵衛、有るぜ〳〵」

源兵衛「へイ〳〵、宜う御座んす、一番若旦那へ奉公始め、骨を折つて見ませう」

德兵衛「サア之れはほんの志、禮は跡でするぜ〳〵」

源兵衛「ハイ〳〵〳〵」

ト黄判を貰うてペコ〳〵頭を下げる、此の時、女房お時出で來りて、

お時「おゝ德兵衛さん、今家の人から樣子を聞きましたが、ほんに感心な心がけ……」

源兵衛「ヤイ〳〵〳〵、少しは氣を附けて物を云はんかい、あの御方はなア、川岸の若い衆、德兵衛と云ふのは世を忍ぶ假りの名、誠本名は大阪在の大百姓の若旦那」

お時「おや〳〵〳〵〳〵」

源兵衛「何がおや〳〵〳〵か、之れから贔屓にしてやろと、一寸下さる御祝儀が之れだ」

ト黄判を示す、

お時「おや〳〵〳〵」

源兵衛「何んだい此の女まるで鳩が豆鐵砲でも喰つた樣に目ばかりパチクリさせやがつて、遉に若旦那だ、こちらに來て居る小三に見染められて、取り持てこのお言葉、こちら夫婦も奉公始めだ」

お時「それぢやあの小三さんを……」

源兵衛「さうよ、早う彼方へ行つて、御挨拶をしろい」

ト お時を德兵衛の傍へ突きやる、

お時「へえ〳〵まあ若旦那、今日まで少しも存じませぬ事こて、失禮ばかりいたしました、其の代りには小三さんは屹度私共夫婦が骨を折りまして、叶へてお見せ申ます」

德兵衛「有難い何卒頼みます〳〵」

お時「ハイ〳〵〳〵これうちの人、お前御座敷はごちらにしよう」

源兵衛「何方も此方も有るものか、一番上々の御座敷へ案内しろ」

お時「さア何卒かうお出でなされませ」

ト德兵衛の手を取り下手へ來りて、源兵衛に向ひ、

「お前さんドジだから氣をお附けよ」

源兵衛「亭主に向つて何にを言やがるんだい」

ト德兵衛は黃判を取出して、

德兵衛「おかみさん、さ、志ぢや、手を出しなされ」

お時「誠に濟みません」

ト手を出す、受損ふて黃判を落す。德兵衛は慌てゝ拾ひ取り、勿體無い科にてお時と顏見合せて、氣味合、

德兵衛「さア取つこいて」

ト氣を替へて再び渡すト唄になり、手を引かれて家へ入る、源兵衛肴膳を片付て居る此の時花道より川岸の佐吉いで來りて、其の邊りをウロ〳〵探し居る。

源兵衛「おや佐吉さんぢやねへか」

佐吉「おゝ武藏屋の親方、今此處へ德兵衛は來なかつたか」

源兵衛「德兵衛……ア、來たよ……」

佐吉「來たかい」

源兵衛「來た事は來たがもう出發つた」

佐吉「其いつはしまつた事をした、實はなア親方、德兵衛に二分借りが有るので用先から歸つて來たら、急に國へ歸る事になつて今出發つたと聞いたから、外の者ぢやなし平常から物固い德兵衛だからと思つて、急いで返しに來たが、詰らなかつたなア」

源兵衛「手前德兵衛に金を返しに來たのか、イヤ正直な男だ、ヨシ俺れが德兵衛さんに返してやらう」

佐吉「親方が返して下さいますか」

源兵衛「ウム渡してやらう」

佐吉「ぢや濟まねえが賴みますよ」

ト二分取り出して渡して、下手へ行きかけて、

「ネエ親方、お前さん德兵衛は出發つたと言つたつけねへ」

源兵衛「出發つたよ」

佐吉「ヂヤ其の金は誰れに返して下さるんです」

源兵衛「フム……アヽさう〳〵出發たつけねへ」

ト以前の二分を佐吉に渡す、佐吉はブツ〳〵言ひながら花道へ行くを德兵衛は呼び止める、

源兵衛「おい〳〵」

佐吉「ヘイ」

源兵衛「何か用かい」

佐吉「お前さんが呼んだのぢやねへか、怎うかして居るなァ」

ト走つてはいる、源兵衛は跡を呆然として見送り居る、處へお時いで來りて、突然に後から肩を叩きながら、

お時「モシ一寸お前さん」

源兵衛「アッ……喫驚すらァ、馬鹿野郎」

お時「ホイ濟まなかつたねへ、だがねへ、お前さん、こう〳〵出來たよ」

源兵衛「何が」

お時「小三さんこサ……」

源兵衛「おや〳〵〳〵」

お時「あの樣子では、小三さんも餘り惡くは無いらしいよ」

源兵衛「おや〳〵〳〵、金の威勢こ云ふものは、怖しいものだなァ」

お時「私何んだか、氣が惡くなつたわ」

源兵衛「餘り好い氣持のものぢやねえからなァ」

お時「之れから私こお前さんこ、仲よく仕樣ねへ」

源兵衛「何を言ふて居やがるんだへ」

お時「あらワチキや恥しいわ……」

源兵衛「アヽ氣味の惡い嬶だなァ」

ト之にて唄になり、小三に手を引かれて德兵衛丹前姿となりて內よりいで來る、源兵衛お時は此の體を見て、

源兵衛お時「ヨウ〳〵御兩人さん似合ます〳〵」

小三「おかみさん親方、ひやかしちや厭ですよ」

源兵衛「まんざら惡くもありますまい」

小三「おやお手の筋だ事ねへ」

お時「小三さん岡惚れねへ」

小　三「岡惚れしては悪いんですか」

お　時「おゝ暑い〳〵」

源兵衛「惚けは恐入りますな」

お　時「本統に手嚴しいねへ」

源兵衛「此處に居ちや邪魔になるから、早く彼方へ行かうよ」

お　時「さうかねへ、彼方らは彼方ら、此方らは此方ら、お前さん私と一緒においでよ」

ト源兵衛の手を取る、

小　三「おかみさん、岡惚れねへ」

源兵衛「おかぼれしちや悪いんですか」

小　三「飛んだ返り討ちだわ」

ト唄になり、源兵衛お時は下手内へはいる。小三は跡見送り、

小　三「もう誰も居なくなつてよ……ネエ之れからは花火の世界、おやなぜ其麼にふさいでゐるの、ア、悪酔でもしなすつたの」

ト德兵衛思案に昏れたる體にて、漸く頭を上げて、

德兵衛「小三さん、水一杯おくなはれ」

小　三「小三さんなんて改まつて、水ですかよう御座んす、之れは先の御恩返しねへ……主の御傍で水仕事なんて、おつですわねへ」

ト唄になり、水を取りに下手へ行く。德兵衛は財布を出して中の金を改め、悄然として泣く、小三は水を持ち來りて、

小　三「ハイお水……」

德兵衛「末期の水、御有難う御座ります」

ト水を呑む、

德兵衛「小三さん、これ貴方に上げますわ」

ト財布を渡す。小三は不思議の思入にて、

小　三「一兩二分の此のお金は……」

德兵衛「小三さん、聞いとくなはれ」

ト男泣きに泣く、相方となる、

德兵衛「國を出てから丸三年、親を大事と一生懸命、夜の目も寢ずに貯めた百兩、遣ひ殘した一兩二分、小三さん笑ふとくなはんなや、恥を言はねば理が判らぬ、先き大阪在の大百姓と言ふたのは、皆嘘ぢや……顏を見なはれ、人相でも判りますがな」

ト自分の顏を指で押へて、

德兵衛「私の親は水呑百姓、三年前の大荒れで、人手に渡つた親の身代、取戻さうと一生懸命、花のお江戸で丸三年、やう〳〵貯めた百兩で、故郷へ錦を飾らうと、船待ちして居る其のこころへ、貴方がおいなはつた……惡いこころへ來とくなはつたなァ……水の無心の介抱に、貴方、私の手を握つて笑ひなはつたなァ……何んで笑うとくなはつたのや……につこり笑ふた、あでやかさ、とても男と生れたら、ァゝ云ふお方と一度でもと、思ふたら矢も楯も堪まらず、國の事も親の事も忘れて仕まひ、望みが叶ふたうれしやと、目が覺めて見れば財布は空……モシ私かてはじめから、こんな助平やおまへなんだが、今更國へも歸られず、河岸の親方へは尙ほもごれず、其の申譯けに此の兩國から身を投げて……」

小　三「えッ」

ト驚く、

德兵衛「いえ私一人だすぜ、貴方も一緒に死んごくなはれと、其麼厚皮敷い事が云はれますかいな、せめては一兩二分のお金で、恁う〳〵した阿呆が有つたと、思ひ出した日を命日に、一本の線香でも、悄れた花の一ッでも、手向けておくれな

はれ、掛りや連がる水の縁、始を思ふて見なはれ、皆水の縁だすがな……」

小　三「徳兵衛さん、堪忍して下さんせ」

徳兵衛「何んの減相な、貴方が悪い事は御座りません、皆私が悪ふ御座ります」

小　三「徳兵衛さん、私はお前に惚れました」

徳兵衛「よう惚れておくんなはつた、然し何程惚れて貰うても、私はもう死なねば成らぬ體で御座ります」

小　三「さァ〳〵其の死ぬる處に惚れましたのサ」

徳兵衛「妙な處に惚れなはつたなァ」

小　三「さァまだ半玉の時分から、ほんに男は薄情ご、一生一人で暮さうご思ひ詰めた此の小三、必ず笑ふて下さいますな、身に沁みぐ〳〵ご戀風の、胸にこたへる其の矢先、今の話を聞くにつけ、多寡が知れた藝者の小三、勿體無いご云はうか有難いご申そうか、厭でも有らうが徳兵衛さん、女房に持つて下さんせいなァ」

徳兵衛「何んご仰つても、モウ死ぬ體で御座りまする……」

小　三「さァ〳〵其處が相談、私もお前も若い身空、死んで花實が咲くぢやなし、百兩ご云へば大金なれご、親方さんに話して、證文一枚書替へれば、後ごも云はずたッた今、貸して下さる其のお金で、錦を飾つて歸つて下され、其の代りには徳兵衛さん、勤め大事に借金拔いた其の上で、必ず訪ねて行きますから、女房に持つて下さりませ」

徳兵衛「スリや土百姓の女房に……」

小　三「鋤鍬持つて暮しませう」

徳兵衛「小三さん……」

ト嬉しき科にて小三に縋る、此時花火の音大きく聞こゆ、徳兵衛驚く、木頭より賑かな囃子になり、暗轉になると（之れより三年後と印したる行燈を下げる）

(2) 大阪市岡新田田植の場

本舞臺平舞臺、田地書割の中遠見、舞臺中央に莚を二枚程敷き有る、大勢の男女の田植の體宜しく、處へ子守女お松出で來りて、背負て居た子供が小便を垂たる樣子を見せてよろしく面白味、宜き處へ百姓德右衛門、百姓の拵へにて出で來る。

ト此内、各自田植唄をうたふ事、

德右衛門「これ〳〵モウ晝ぢや、皆も一ト休みして飯を喰へよ」

皆々「おい〳〵飯にしようか〳〵」

ト口々に云つて上下へ別れて這入る、處へ分家七兵衛來りて、中央の莚の上に德右衛門と並んで座す、德右衛門は傍の櫃から握飯を出して食しながら、

德右衛門「七兵衛や、今年も豐年で結構ぢやなア」

七兵衛「此處二三年は百姓も大嬉びぢや」

德右衛門「さいなア、それにしても思出すのは七年程前の不作、私や思ひ出しても身の毛がよだつわイ」

七兵衛「われあの時に水牢へ行く處、八右衛門の處へ田地を渡して、漸々其の日を送つて居たが、今では市岡では誰れに劣らぬ大百姓、世の中の事は怎うなるやら、力を落す事も無いわい……」

德右衛門「それと云うのも悴の德兵衛が、あゝして江戸迄出かけて、三年の間に大枚百兩と云ふ金を儲けて歸つて呉れたので、今ではわれの云ふ通り、市岡新田の大百姓、持つべきものは悴ぢやのふ」

七兵衛「悴も色々有るが、次良作の悴見たいな、博奕打の仲間人をしよつて、親に難義ばかり掛け居るが、其處へ行くとわれとこの德兵衛は、親孝行の評判者ぢや」

德右衛門「それはな、私の口から悴の事を云ふでは無いが、德兵衛は人間が賢いでなア」

七兵衛「われの口からさう云ふと、何んにも云はれへんが、なァ德右衛門、俺は德兵衛が御江戸から澤山なお金儲けて、歸つたと聞いて居るが、われ今百兩と云ふたが、ほんまにそないに澤山持つて來たのかい」

德右衛門「ほんまとも〳〵、俺は其の金見た時に、夢かと思うたわい」

七兵衛「ほんまに百兩」

ト頓狂な聲、

七兵衛「フムわれ百兩と口でこそ云ふものゝ、百兩と云ふたら一兩が百ぢやぞ、百兩がどこ米買ふと思うて見い、餘ッ程えらいぞ」

德右衛門「さァ其の金も並の男ぢや儲からんぞ」

七兵衛「夫りやわれの處の德兵衛は……」

德右衛門「俺に似て賢いでなァ」

七兵衛「それは俺が云ふのぢやへ……ナァ德右衛門、德兵衛ももう宜い加減に鼻貫らわんと怎うもならんナァ」

德右衛門「其の事で此の間も鍛際の吉兵衛の娘を貰うてやらうと思うてな、忰に話をした處が、忰の云ふには今私が嬶を持つて、若しも親父さんに氣に入らぬ樣な事でも有つては、親に心配をかけたり、苦勞をさす樣なものぢやで、もう四五年も待つて、あれならばと試した上でなければ未だ〳〵早いと云ふてなァ、怎うしても貰わんと云ふのぢやがな」

七兵衛「感心ぢやなァ……と云ふのが」

德右衛門「俺に似て賢いわい」

七兵衛「又われから其麼事を云ふ」

德右衛門「あはゝゝゝ堪忍しておくれ……」

七兵衛「まだ茶も持つて來んなァ」

德右衛門「まァ一服せい、今に持つて來るわい」

ト二人は握飯を喰ひ始める、誂への囃子になり、花道より女非人お三、汚穢らしき非人好みの拵へにて出で来り、直ぐ本舞臺へ來り、

非　人「何卒一文やつて……」

ト徳右衛門の傍へ寄りながら、

非　人「何卒お餘りやつて下さりませ」

七兵衛「やい、なんかすぞい、汚ない、彼方へ行け〳〵」

徳右衛門「これ七兵衛、其麼事云うなへ、待て〳〵」

ト握飯を片手に持つて、

徳右衛門「これ〳〵お菰さん、此處は見た通り、皆百姓が野良仕事をして居る所ぢや、何んぼ貰ひに歩いても、何にも有りませんでナア、さあ、此處に握飯が有るゆへ之れを進ぜる、早う町の方へ往きなされ」

非　人「まア〳〵御親切に有難う御座ります、アノ一寸物を御尋ね致しますが、市岡新田はごの邊で御座ります」

徳右衛門「お前さん言葉の樣子では關東の人ぢやな、市岡新田は此の村ぢやが、何んぞ尋ねる人でも有るのかい」

非　人「市岡新田で百姓徳右衛門さんと云ふお方を御存じで御座いますか」

七兵衛「徳右衛門や……おい徳右衛門お前を尋ねて居るのやぜ」

徳右衛門「えッ八釜敷奴ぢやな」

ト非人に向ひ、

徳右衛門「ハイ徳右衛門は俺ぢやが、お前さんは何んぢや」

非　人「そんなら貴方が市岡新田の徳右衛門さんで御座いますか、そんなら私のお親父さんや、アヽ逢ひたかつたく〳〵」

ト非人は徳右衛門に縋るのを、徳右衛門驚き振拂いて飛退き、

徳右衛門「アヽこれ何にをするのぢや、お父さんなんて私は娘は御座りません、何

んぞお前さん間違ひぢやないかへ」

非　人「成程恁うばかりぢやお判りにも成りますまい、實は私は元お江戸の柳橋と云ふ處で、褄を取つて居りました小三と云ふ藝者のなれのはてゞ御座ります、三年前に貴方の息子さんの徳兵衛さんと云ふ人と、二世も三世も變るな變らじと、云ひ交した女房で御座ります。さうして徳兵衛さんは無事でお出でなはれますかいな」

七兵衛「徳兵衛はお前……」

ト云いかけるを、徳右衛門慌てゝ止めて、

徳右衛門「わりや默つて居い」

ト叱り附けて非人に向ひ、

徳右衛門「成程夫れで話がわかりましたが、お前さん力を落しなさんなや……ぢやがナア、お前さんが折角訪ねて來なさつた悴も、運の惡い時は仕方の無いもの、江戸から歸るこ間も無く脚氣が起り、夫れが元でトウ〳〵去年死にましたのぢや」

非　人「ア、左樣か」

ト平氣の體、

徳右衛門「えらいあつさりした人ぢやなア」

七兵衛「徳兵衛が脚氣で死んだつて……」

徳右衛門「コリヤわりや默つて……」

ト押へ附ける樣に止めて、

徳右衛門「へえゝゝ今も言ふ通り、悴も死んで此の世に居らず、よし悴が生きて居ても、こなさんの其の裝りで、今は市岡新田で一二と云はれる大百姓の悴の嫁には、怎うも親の身としてはなア……」

非　人「添はされんかいな……」

徳右衛門「ウム……まあ添はされんなァ」

非人「然し肝心の徳兵衛さんが死んでは仕方が無い、貴方も大事の息子さんに死なれて、定めし力を落して居なさらう、まァ〳〵何も因縁ちやでなァ」

徳右衛門「なか〳〵あつさりした人やなァ、マァ〳〵今云ふた通の譯ぢやで諦めて下され、此處に少しばかりのお錢が有る……」

ト莨入より小錢を取り出して、

徳右衛門「之れを進ぜますで、早う此の村を出て大阪の方へ行きなされ、さうすれば貰ひも澤山有るでなァ、お前さん何卒助けると思ふて今の樣な事を、此の村で云ふて下さらぬ樣に賴みますぞや」

非人「はい〳〵宜しう御座ります」

ト立上りて花道附際へ行きかけて、

非人「なァお父さん、徳兵衛さんがよしや生きて居た處で、あゝあの親御さんでは……」

徳右衛門「えッ」

非人「これを御緣に之れからは又チヨコ〳〵貰ひに參ります、有難う御座ります」

ト花道へ這入る、徳右衛門は跡を見送り呆然として居る、

七兵衛「なァ徳右衛門よ、徳兵衛が江戸で云ひ交した女はお菰ぢやさい、われに似て賢こいのう」

徳右衛門「えゝ何にを吐すのぢやい、コラ誰れにも恁麼事を云ふなよ」

七兵衛「チツトショー」

ト立上りて花道へ行きかけて、向うを見て、

七兵衛「オヽ徳兵衛が戻つて來たぞ、ヤーイ徳兵衛ヤイ……」

ト之れにて變つた唄になり、徳兵衛は野良仕事の歸りの姿にて、荷を擔ぎ花道より出で來る、七三にて七兵衛と出合ひ行き違ひに、

七兵衛「おゝ徳兵衛……」

徳兵衛「伯父さんか、お父さんは知らんか」

七兵衛「今水車の處に休んで居るわい」

ト徳兵衛の顏を覗き込んで、

七兵衛「ナア徳兵衛、われは色男ぢやなア……隱しても知つてるぞ」

ト捨白詞にて、徳兵衛にからかひながら花道へ這入る、徳兵衛何事とも判斷つかぬ科にて本舞臺に居直る、荷物をおろして徳右衛門の傍へ來り、捨白詞にて豐年で結構で有る抔と云ふ、徳右衛門は耳にも止めず、ぶつちやう面をして無言の儘莫を吹かして居る。徳兵衛は其の樣子を打ち眺めて、不思議相に傍へ摺り寄つて、

徳兵衛「お父さん、貴方何んぞ怒つて居なはるな」

徳右衛門「一寸怒つてます」

徳兵衛「又小作の者と云ひ爭ひをしなばつたな、あんな者の言ふ事を、一々取り上げて居たら果しがおまへん、腹立てるだけ損だすぜ」

徳右衛門「俺ら其麼事で怒つて居るのぢやないわい、お父さん今日程汗が出た事は無いわい、わりや酷い目に逢はせやがつたなア」

徳兵衛「其麼にえらかつたら休んだら宜しいがな、此の間から煩さい程お父さんもモウ此の年で野良仕事もえらうおますやらうさかいに、モウ樂隱居しなはれと勸めて居るのに、人間は働けるだけ働かねばならぬと云ふて、無理して勝手に腹立て居なはるのやがな、ナア、お父さん、之れから一杯呑み直しませう、私も今日は休んで一所によばれます、サア機嫌直して一所に歸りませう」

徳右衛門「お父さんは其麼事で怒つて居るのやないわい」

徳兵衛「そんなら何んで怒つて居なはるのやいな、親一人子一人の仲やおまへんか、腹の立つ事が有るなら、徳兵衛や俺は恁ふ思ふて居ると、言ふて聞かしておくなはれ」

德右衛門「そないに聞きたければ聞かしてやる、其の前にお父さん改めて禮を言ひます、七年前の大荒れで、人手に渡した身代も、お前の御蔭で元々通り、今では此の村で押しも押されもせぬ大百姓、お父さん忘れはしまへんぜ」

德兵衛「之れは又何にを言ひ出しなはるや、モウそんな事は怎うでも宜しうおますがな」

德右衛門「いやさうぢやない、禮は禮で言ふて置きます、シテお前に聞きたい事が有る、お前江戸で夜の目も合はさず一生懸命働いたと言ふたなァ」

德兵衛「そりやモウ一日も早う國へ歸つて、お父さんの喜ぶ顔を見たうてなァ」

德右衛門「なんかすぞい」

ト大きく言ふて、

德右衛門「其麼甘い事を吐して、お父さんを今日迄欺して居たのやろ、われ江戸で女狂ひをして居たで有らうがな」

德兵衛「お父さん何にを言ひ出すやら、人が好いものぢやで、又誰ぞに嬲られなはつたのやらう」

德右衛門「吐すない、わりや柳橋の藝者で小三と云ふ女子と夫婦約束までさらして歸つて來たぢやらうがな、違ふなら違ふと云ふて見い」

ト言はれて、德兵衛はハットしたる思入有つて、少し急き込みながら、

德兵衛「お父さん貴方其麼話を誰れから聞きなはつたのや……」

德右衛門「今其の小三と云ふ女が此處へ訪ねて來たわい……」

德兵衛「えッあの小三さんが……訪ねて來ましたか」

ト慌しく夢中になり、立上りて上下をウロ〳〵しながら、

德兵衛「小三は何處へ往きました、お父さん〳〵」

德右衛門「これ何んと云ふ奴ぢやい、お父さんの云ふ事を聞かんかい、話も聞かんと慌てくさつて何をさらすのぢやい」

德兵衛「お父さん、小三は何處へ行きました〳〵〳〵」

ト無我夢中になり、邊をウロ〳〵する、

德右衛門「何んと云ふわりや情け無い奴ぢや、ア、……お父さんはあの小三を見て喫驚したわい」

德兵衛「夫りや貴方喫驚しなはるは無理はおまへん、此の邊りにあれ丈けの女はありやしまへん」

德右衛門「三千世界を訪ねても、あんな女は又と有るかへ」

德兵衛「そりやお父さんなごは、此の片田舍より他は知りはらんゆへ、喫驚しなはるのは無理はおまへん」

德右衛門「あゝ……何んと云ふ情け無い事を吐すのぢや……」

德兵衛「好い女でおますやらうがな」

德右衛門「何に吐すのぢやい、二た目と見られぬ穢い裝して、おまけに梅毒が總身に廻り、顏中ベツタリ膏藥だらけ、見るも厭やらしいお菰ぢやわい」

德兵衛「えッ……あの小三さんがお菰に……」

ト驚天する科、

德右衛門「怎うぢや假令約束した女にせよ、今云ふ通りの女ぢやで、モウ其麼者は諦めて、此の間からお父さんが云ふて居る太良兵衛の娘のお高を嫁に貰うてくれ、さすれば俺も安心が出來る、さうして早う初孫の顏でも見せて吳れ、お父さんが賴みぢやナア……これ德兵衛よ」

ト眞心込めて云ひ聞かす、德兵衛落膽をしたる科にて、男泣きに聲を上げて泣きながら、

德兵衛「厭やだす〳〵お父さん、私はあの女は諦められません〳〵」

德右衛門「何んぢや、よう諦められん」

ト少しカツとなつて、

德右衛門「コラ、女の掛替は有つても親の掛替は無いぞ、ヨシわれがさう云ふ量見なら、勝手に其の女ゝ添へ、俺も又われゝは其の代り親子の縁を切つたぞ」

ト怒りながら立上る、德兵衛父の袖を捕へながら、

德兵衛「お父さん待つゝくなはれ〳〵、此の事ばかりは決して誰にも云ふまいゝ心に錠は卸したなれど、恁うなつたら言はずにはゐられまへん、三年前に自慢らしう、儲けた金ぢやゝ持つて歸つた百兩は、今の女に貰うた金……」

德右衛門「何んぢやゝ……」

德兵衛「儲ける事は儲けたが、皆んな遣ふた、お父さん堪忍しゝくなはれ〳〵、切迫詰つて兩國からすんでに身を投げ死ふゝした其の時、今の女に助けられ、苦界の中から百兩の金を貰うて、恥を包んで故郷へ錦を飾つて歸りました、今お父さんの話では、二た目ゝ見られぬ裝りをして、私を訪ねて來たゝの事、假令乞食が不具者でも、幾千代かけて添遂げねば、人間の道が立ちませぬ……お父さん後生や、添しておくなはれ〳〵」

ト涙ながらに語る、仔細を聞入りたる德右衛門は、莚の上にペッタリ坐して、

德右衛門「德兵衛堪忍してくれ〳〵、お父さん其麼事知らぬ故、德兵衛は死んで仕舞ふたゝ云ふて返した」

德兵衛「えッ……何んで其麼事云ふていなしなはつたのやいな〳〵」

德右衛門「われも其麼事があるなら、何故モット早うお父さんの耳へ入れゝかんのぢやへ」

德兵衛「でも親をつかまへて、其麼惚けが云へますかいな」

德右衛門「お父さん惚氣は大好で御座ります、サア早う行つて來い〳〵」

德兵衛「何方へ行きました」

德右衛門「彼方ぢや」

ト花道の方を指さす、德兵衛行きかける、誂への急がしき囃子になる、

徳右衛門「徳兵衛待て〳〵、お前小三に逢ふたらお父さんが知らぬ事こて誠に濟まなんだこ、詫び云ふて呉れよ……」

徳兵衛「其麼事は後で緩り云へますがな」

ト宙を飛ぶ如く又行きかける、

徳右衛門「徳兵衛待てやい、假令此の村で添へねば親子三人手に手を取つて、他國で暮そうこ云ふて呉れいよ……」

徳兵衛「お父さん……」

ト喜びあまつて兩手を合すを、

徳右衛門「え〻何をさらすのぢやへ、早う行かんかへ」

ト徳右衛門は徳兵衛を突きやる、徳兵衛花道へ勢を得て行く、徳右衛門は捨て白嗣にて早う行け〳〵と云ひ居る處へ、下手より子守女お松土瓶に湯を入れて提げ來り、徳右衛門に突當りて土瓶を取り落す、中より湯が溢出して兩人の足へかゝる、徳右衛門は夢中になり、足をイキロ〳〵と飛び上りながら徳兵衛に早う行け〳〵との科、子守女も熱さをこらへながら、徳兵衛と徳右衛門の樣子を見る、此模樣極く忙しき囃子にて徳兵衛は花道へ這入る、宜しく道具一轉する。

(3) 村外れ茶店の場

本舞臺平舞臺、正面野面の背景、上手に田舍茶店、茶釜、草鞋、茶盆、燗徳利等總て茶店の道具を調へ、其の上手に溜に藥の家根を附け有る、中央に一臺の床几を置き所々立木澤山。總て田舍町外れ茶店の體よろしく、誂への囃子にて道具納る。

ト藝者小三と非人お三の兩人、何か窃に話し居る體にて道具止まる、

小三「それでは徳兵衛さんは死んでしまつたんですか」

非人お三「左樣で御座ります、又夫れで親こ云ふのが話をしたこて、譯の判る樣な方

ぢや御座いません、假令德兵衞が生きて居たとて、其麼穢い者は親の身として濟わされぬと、私の身裝りを見て云ふて居りました」

小　三「昔の義理も人情も忘れて仕舞うて、よう其麼事を云はれたもの、然し德兵衞さんが死んで仕舞うたら仕方が有りません、私の事を親御さんに話さなかつたと見へますなァ……」

非　人「さァ迚も話たとて譯の判る親父ぢやないと思ふて、話さなんだと見えます」

小　三「さう云ふお方達なら、話たとて駄目だわネへ」

非　人「左樣で御座ります、却つてお會ひなされぬ方が御爲で御座います、其麼綺麗な裝りをしてお出でなされましたら、嘘を云ふて着物迄剝ぐかも知れませぬ、然し先き願まれました時は、德兵衞さんの心が變つて居りませぬか、探つて呉れさうすればお酒も呑ましてやると仰いましたが、肝心の玉が死んで仕舞ふてはモウお流れで御座いますか……」

小　三「ほんにスッカリ忘れて居た……」

ト茶店の方を向きながら、

小　三「お婆さん〳〵」

ト茶店の婆はヌーと出で來り、キョロ〳〵して居る、

小　三「此のお方に御飯を上げて下さいな」

おくら「ハァ此の樣子なら明日も天氣で御座りまする」

小　三「さうぢやないの……此のお菰さんに御酒をふるまつて上げて下さいな」

ト宜しく手で仕形をする、

おくら「へえ……判らぬ者ぢやなァ、御氣毒に御姉妹かいな」

小　三「お婆さんは耳が遠いんだねへ……此のお菰さんにお酒を上げて下さいな」

おくら「お錢は……

小三「私が拂ひます」

おくら「アヽよし〳〵サアお孤さんおいで……」

ト三人は茶店の中へ這入る。同時に忙しき囃子になり、花道より德兵衛いで來る、上手より百姓權兵衛いで來り、七三にて行違ふ、

德兵衛「おいお前若しや途中で乞食ご會はなんだかへ」

權兵衛「逢ふた」

德兵衛「逢ふたか、何處で」

權兵衛「あの向うの土堤の下で」

德兵衛「女の乞食か」

權兵衛「イヤ……男やぜ」

德兵衛「エヽ……」

ト癇癪を起して、權兵衛を突き飛ばす。權兵衛は氣訝な顏をしてブツ〳〵云ひながら花道へはいる、德兵衛焦りながら邊りを見廻して本舞臺へ來ると、上手より啞娘のお花いで來り、德兵衛と行き違ふ、

德兵衛「これ……今こゝへ女の乞食は來なかつたか」

ト急き込んで尋ぬる、お花は耳と口に手を當てゝ判らぬと云ふ科。德兵衛は啞かと云ふ科有つて突きやる、お花は德兵衛の樣子を見ながら花道へ這入る、德兵衛上下をウロ〳〵しながら、判らぬと云ふ科にて中央に來りて、

德兵衛「此方へ行けば太阪街道、彼方へ行けば勝間街道、一體何方へ行つたやら……」

ト堪へ兼ぬる科にて、

德兵衛「小三さん〳〵」

ト一生懸命に呼ぶ、茶店の窓より小三は此の樣子を見て、再び乞食に願む、女非人は心得顏に走り出て、德兵衛の傍へ行き取り縋りて、

非人「徳兵衛さん、逢いたかつた〳〵〳〵」

徳兵衛「お丶……小三さん……」

ト抱きしめる事稍暫らく、

徳兵衛「顔形から裝り振りまで、よふまあ之れまで變りなされたなァ」

非人「面目無い〳〵」

徳兵衛「なに面白無い事が有るものか、面目ないこは他人こ他人、夫婦の中で何を恥じよう、假令襤褸を纏ふこも、私の目からは錦も同然、ヨウマア訪ねておくなはつたなァ」

非人「モシ徳兵衛さん、一たんお前こ夫婦約束はしたなれど、もウ願ひ下げにしてほしい」

徳兵衛「こは又何故に」

非人「何んでもかんでも云はねばならぬ錢儲け」

徳兵衛「エッ」

非人「錢儲けて三年前……」

ト之れにて相方入りとなる、

非人「而かもお江戸の兩國で、すんでに死ふこした處、私が止めて其の時に、末は夫婦こ固い約束、それ樂しみに年を明け、永の道中遙々こ尋ねて來たらお前の爺の禿頭、昔の義理も人情も、知らぬ顔の半兵衛で、徳兵衛は死んた抔こヨウまあペテンが云へたもの、之れもみんなお前の指金、若しや私が立派な裝り振りで尋ねて來たら、元の樣に欺してやらふこ、さうは何時も〳〵柳の下に鰌は居らぬ、ヌラリクラリの鰌男、泥水呑んだ私でも、モウさう〳〵は欺されぬ」

徳兵衛「さりこては情け無い、ヒョンな事から疑はれ、鰌男こは餘まりな、ツイ恥しさに父さんに話をせぬは私の誤り、斯う〳〵した女ぢやこ、話して見れ

ば父さんもそれは濟まぬ早う行つて連れて歸れよ、假令此處で添はれずとも、他國でなりとも親子三人手に手を取つて暮さうと、嘘や冗談で言はれませうか、機嫌直して歸つて下され〳〵」

非　人「厭やぢや〳〵〳〵、私や厭ぢや、生きて居る者を死んだ扨と、ヨウまあ嘘が言はれたもの、お前は一旦死んだ人、死んだ徳さん話にならぬ、丸い玉子も切りよで四角、物も言いよで角が立つ」

徳兵衛「そんなら之れ程云うても通じんか」

非　人「通じぬ〳〵、薩張り通じぬ……」

徳兵衛「通じぬなれば是非が無い……小三さん貰ふて下だんせ」

非　人「おあまりかへ」

徳兵衛「俺の命の餘りもの、三年前に兩國で、死ぬる命を長らへて、來たのも皆んなそなたと添ひたい故、其の望みが叶はねば、生きて詮なき此の體、死なば諸共小三さん、死んごくなはれ……」

非　人「そりや一度聞いて見ねば判らぬ……」

ト茶店の中を覗く、

徳兵衛「聞くとは誰れに」

非　人「ムウ……私の胸に……」

徳兵衛「まだ其の樣に疑ふてか、斯くまでに僞り多き世の中に、死ぬる斗りが誠ぢやと、寺の和尚がさう云ふたぞよ……怎うせ死ぬなら同じ刀で同じ土……小三さん、無理心中ぢや許して下だんせ」

ト云ふて非人に切つて掛る、非人は驚き逃げ廻る、宜しく二三立廻り有る、女非人は上手の肥壺へ落ち込み足をバタ〳〵する、それを眞向に鎌を振り上げて、切らんとする時、小三いで來り、後より抱き止める、兩人顏見合す、小三は徳兵衛を下手へ突きやつて、兩手を合すのが木頭、

徳兵衛　「お、……」

ト無限の思入れ、

小　三　「徳兵衛さん……」

ト兩人宜しく氣味合、誂への囃子になり、思入の内に靜かに……

滿　來

水晶の名玉

【一場】

藝妓松の家てる子宅の場

登場人名

加藤幸次郎	五郎	【俳優】
同人父　幸兵衛	太郎	
同分家　與八	蝶六	
藝妓松の家　てる子	大磯	
同　菊丸	工之助	
同　おさだ	花蝶	
雇婆　おちか	蝶七	
女中　お久	笑將	
藝妓　光子	政子	
同　こん子	富子	
同　關西綿糸會社支配人　高岡順吉	小みね	小時郎

藝妓松の家照子宅の場

本舞臺二重人形飾、上手落間廊下附き、上雪隱へ通ふ心、有明行燈を掛け、見附欄子窓、正面見付上手に二階へ通ずる階段（此の二重にて人聲三味線太鼓等の音を舞臺へ聞かす事有り）階段に續き地袋半押入、其上に人氣棚に不動尊を祭り、招き猫人氣提燈、三寶にお多福、十日戎の小寶等を飾り、續いて下手へ一間半の意氣な障子、其下手壁に半間の三味線掛、之れに三丁の三味線を掛け、其上に藝者の引祝の紙を五六枚張り、其の横に掛時計は朝の十時を示し居る、其の下手に白地硝子入の一間の風流なる水屋棚を置き、此の中に夫婦飯臺、男女の茶碗、奇麗な箸箱、飯櫃、水菓子、小鉢、納豆入、鹽昆布、漬物、生玉子、何れも意氣な小鉢に入れ有る、其

の下手落間となり勝手元へ通じる心、半間の板の間正面板張りに小棚を拵へ、石鹸、歯磨、歯楊子、ニツケルの小さき金盥等を並べ、其の下に竿に西洋手拭を二三かけ有る、其の上に紐付鏡をかけ例の處に出入口、小家付に格子戸、小家根の下に丸形の街燈に松の家、小田まつと記せし表札に續いて電三百五十八番の札を掛け有る、下手正面花隅町の街を見せたる背景、舞臺中央に大輪の火鉢に銅の銅壺を入れ、鐵瓶を掛け、朱塗の莨箱、長煙管、友仙縮緬の座蒲團二枚、茶道具一式、敷島を入れたる硝子の灰皿、莨入、普通の客座蒲團五六枚、硝子障子の前に友仙縮緬の長襦袢黒の座敷着裾模様の着附を衣紋竿に掛けて有る、硝子障子の上手に畳畫の額を掛け、上手の廊下には釣手洗鉢を掛け、三味線掛の傍には芝居の番附、大入袋等を張り、總て藝者家の朝、十時頃、誂への囃子にて幕開く、

ト藝妓菊丸、おさだ、光子、とん子、小みねの五人は各自島田、銀杏返し、ハイカラ等思ひ〳〵の着附にて藝者の形宜しく三名は三味を彈き〳〵、おさだは大鼓を打ち、小みねはニツケルの金盥を火箸にて叩きつゝ左の歌を各自うたひ居る、雇婆おちかは水屋より膳を出し、飯の仕度をなし居る體。

藝者一同「おまへこなれば何處までも、川崎の白糸瀧の中までもドコいこやせぬ、かまやせぬ、白糸瀧はまだおろか、日光の、けごんの瀧の中までもドコいこやせぬ、かまやせぬ……」

ト大きな聲を出して騒ぎ居る。

おちか「これ〳〵大抵にしなはらんか、八釜敷い、何にも若旦那にも姐さんにも意恨が有る譯ぢやなし、お前方が岡燒の八ツ當りで、朝ッぱらから變な聲を出しなさんな、折角出した漬物の味が變るでなア」

とん子「たつてお婆さん考へて御覽なさいな、もう十時ぢやないの、いくら好いた同士だつて餘りだわ、射し込む日光にだつて少しは遠慮なすつたがいゝわ」

おちか「さア其處か好た同士やないか、日が當ろうが月が射さうが、其麼事で離れ

られるものぢやない、私でも若い時に覺が有る、お前方今の若さで毎晩獨寢をして居る樣な意氣地なしゆゑ、二階の姐さんが羨しいのぢや、其の岡燒で朝ぱらから燒いて三味や太鼓で阿呆かいなァ」

菊　丸「お婆さん隨分ねへ、あたしなんかいくら好な人があつても朝の十時までも寢てやしないわ」

おちか「大きな事を言いなさんな、寢て居やうと思ふても抱への體で寢て居られるかいな、錢がつゞかんがな」

おさだ「お婆さん失禮ねへ、お金と色は別物よ」

おちか「處がさうは行かぬわい、お金の無い色は住み變か情死かぢや、內の姐さんなぞは松の家の照子と云へば何處の御座敷でも羽根が生えて飛ぶし、二階に寢て居る若旦那でもお金はあるし、さッぱりして居るし、お前方の色男と算盤の桁が違ふがな」

おさだ「口惜しい……」

ト小みねに嚙み付く、

小みね「あッ……痛い…何をするのだねへ此人は、まるで色氣狂だよ」

おさだ「だつてお婆さんに、あんな事云はれると、お金のある好い人が欲しいわ」

おちか「まづ其の顏では御思案遊せぢや」

おさだ「あれだ、ちよいと誰か何んとか言つて頂戴な、光ちやん姉妹分じやないか、助太刀して頂戴なね……」

光　子「あたしはお婆さんの云ふ事が泌みぐ尤もだと思つて、無常を感じて默つて居るのよ……」

菊　丸「隨分心細いのねへ」

ト おちかに向ひ、

菊　丸「お婆さん、後生だから二階へ行つて姐さんを起して頂戴な、あたしとお定

さんは、今晩の宴會に鶴龜の地をやるのよ、忘れちやッたから姐さんに一寸聞きたいのよ、ねえ後生だから」

おちか「イヤ〳〵私は其應戀知らずぢやない、折角能く寢て居るものを起して、恨まれては長生が出來ません」

おさだ「焦れつたいねへ、小みねチャン起しておいでよ」

小みね「だつて二階へ上ると、お婆さんが怒るのだもの」

とん子「小みねチャンは、馬鹿にお婆さんに弱いのねえ」

おちか「當り前ぢや、此の間の洋食の拂を取り替へて遣つたもの、七十五錢の大恩人ぢや」

小みね「おや强判執行ねへ」

とん子「姐さんを起したらお婆さんが怒るのだから、自然に起るように又やりませうよ」

光子「それ〳〵、ちよいと皆さん三味線お持ちよ」

おちか「これ〳〵、又變な聲を出して吳れては二階の姐さんより御近所が迷惑ぢや、藝者らしい意氣な聲でも出す事か、豚がペストを患ふたやうな聲を出して何んぢやいな今の歌は白糸瀧の中までも……」

ト節を附けて眞似をする、ト藝者は三味太鼓で囃し立てゝ其の後へつき、

皆々「白糸瀧はまだおろか、日光の、けごんの瀧の中までも、ドコいこやせぬ、かまやせぬ、けごんの瀧はまだおろか、淺間山、吹出す煙の中までも……」

ト皆々歌をうたひ騷ぐ、此の時照子は亂れ髮、襟の掛りたる着物、其の上に意氣などてらを着て、楊子箱を持ち房楊子を使ひながら二階の段梯子より靜に降り來る、おちかは此の姿を見て驚き、

おちか「これ〳〵皆さん、姐さんが眼を醒して降りて來たがな〳〵」

トこれにて皆々手を止めて、

皆　々「姐さんお早う……お疲れ樣……」
　　トロ々に云ふ。

照　子「隨分皆んなで慘めるわね、」
　　トニッコリ笑ふ。

菊　丸「だつて姐さんもう十時廻つてゐてよ」

照　子「判つてるよ、女房が恁麼に朝寢坊をしちや不可ませんと申上げても、宜いから寢て居ろこお仰るのですもの、夫れに起きるこ叱られるわ」

おさだ「菊ちやん何を聞いて居るのだねへ、此方へ寄つておいでよ」
　　ト照子に向ひ、

おさだ「姐さん若い者ばかりですから御手柔かに」

照　子「まア私何にも惚けちやゐないわ、只だ若旦那に叱られたこ言つて居るのよ」

おさだ「姐さん氣を慥に持つて頂戴な」

照　子「えゝ〳〵大丈夫よ、太皷も三味も慥に聞へてよ、昨夜から頭が痛む處へドンチヤン〳〵こ隨分慘酷ねへ」

おちか「姐さん頭痛で……」

照　子「私の頭なんか怎うでも好いわ、若旦那のおつむりがさ……」

おちか「ほい〳〵此方へお鉢が廻つて來た」

照　子「おやお婆さん濟まないわねへ……顏洗ふ水取つて頂戴」

おちか「ほい〳〵」
　　トおちかは下へ降りて、ニッケルの金盆を小みねより取つて湯をくむ、照子は下へ降りて顏を洗ひながら話になる、

とん子「姐さん痩せたわねへ」

照　子「さうか知らん」

小みね「痩せもしますわねへ、此の頃の様ぢや姉さんの命が有る丈けが不思議位るよ」

光子「今に吃度骨と皮よ……」

照子「早く骨と皮になつて戀がれ死に、死にたいわ」

菊丸「姐さん大抵におしなさい、皆生者が傍に居てよ」

照子「あらあたしから好んで云やしないわ、皆が親切に朝から態々惚氣を聞きに來て呉れるのだもの」

おさだ「厭だよ姐さん、惚氣を聞に來たのぢやなくつてよ、今日ねへ菊ちやんと二人で宴會でやる鶴龜を忘れたから、教へて貰ひに來たのだわ」

照子「それなら少し位の惚氣を聞いたつて好いぢやないの、皆もさうなの」

とん子「いえ〳〵三人は違ひますよ、之れから髪を結ひに行くのだけれど、姐さんとこの勝チヤンと、ふきチヤンを誘に來たのよ」

照子「あら折角だけれど二人の抱へは、ミツくに、住替に出してしまつたのよ」

小みね「おやモウ居ないの」

照子「えゝモウ出したのよ、婆やあのお金は今朝取りに遣るのよ」

ト此の内照子は顔を洗ふ。

おちか「お久ごんが八時から電車で行きましたゆへ、もう歸りませう」

光子「姐さん能く賣る二人だつたのに何故出したの、惜しいわねへ」

おさだ「それは光チヤン聞くだけ野暮よ、いくら抱へだつて、毎日之れを見せられた日にや命仕事だわ」

菊丸「全くねへ、此の上は婆やさんに同情するわ」

おちか「私らは若い時分に散々遣つて來たのぢや、二十五の春には黒田様の馬丁で勇の久さんと云ふ人と、すんでの事に情死しやうとしてなア……」

ト二重へ上る。

おさだ「チョイと〳〵皆劔呑よ、婆やに傳染して居るよ」

おちか「其の時のなり染は……」

照子「チョイ〳〵手拭知らない」

おちか「ハイ〳〵此處に持つて居ます」

ト立ち戻りて渡ず、照子は顏を拭きながら二重へ上がり來る、

菊丸「姐さん濟ないけれど敎へて下さいな」

照子「面倒ね、仕方が無いわ敎へて上げるわ、さだチャン此の手拭あそこへ掛けておいて頂戴よ」

おさだ「あいよ」

ト手拭を取りながら照子の二の腕の痣を見て、

おさだ「おや姉さん此の痣、どうしたの」

照子「昨夜嚙まれたのよ……」

おさだ「犬に……」

照子「馬鹿ねへ犬ぢやないわ、昨夜頭が痛いとお仰てそしてお酒だとお仰るのよ、召上つちやお體にさわりますとコップを持つていらつしやる手にしがみ附たら、放せとお仰つてキューとお嚙みなすつたのよ、嬉しかつたわ」

ト思入にて、自分の二の腕の痣の上を嚙む。各自呆れてゐると、光子ば詰らない顏をして無言の儘つと立つて下駄を履く、

小みね「光ちやん何處へ行くの」

光子「何んだか氣が遠くなつたから、先へ髮結さんへ行くわ」

とん子「チョイと人助けだわ、あたしも連れていつて頂戴よ」

小みね「私も行くわ、姐さん隨分お大事に」

照子「厭だよ、病人見たように」

小みね「だつてモウ少しで精神病だわ、左樣なら」

とん子「左様なら」

ト小みね、とん子、光子の三人表へ出る、

照　子「何んのお愛想もなかつたわね」

光　子「御馳走が有りすぎたわ」

小みね「菊ちやんも定ちやんも命の有るうちにお歸りよ」

おさだ「サンキュー」

菊　丸「傳染しない内に歸るわ」

とん子「おばさん左様なら」

おちか「又明日聞きにおいでなされ」

とん子「もう眞平、明日來たら患ふわ」

光　子「私は今日から神經衰弱よ」

三　人「おほゝゝゝ」

ト笑ひになり、捨白詞にて下手へはいる、此内おちかは水屋よりニツケルの盆に白ブドー酒、コツプ、玉子五個を小鉢に入れ、燒パン三ツ、牛乳をコツプに注ぎ、唐木の小さき盆臺に載せ並べ居る、菊丸、おさだは三味線と太鼓を合し居る、

菊　丸「姐さん聞いて下さいな」

おさだ「お願ひします」

照　子「靜にねへ、爪彈で無くちや若旦那がお目を醒すからねへ、太鼓も爪彈でねへ」

おさだ「姐さん太鼓は爪彈ぢや出來やしないわ」

照　子「出來てよそれ」

ト指で太鼓を打つ眞似をして、三味線を持つ、

おさだ「隨分變ねへ」

菊　丸「よくツてよ……千代のためしのかずかずに……」

トうたいかけると、二階にて手が鳴る。

照子「ハイ只今……」

ト其の儘三味線を投出し慌てゝ立上り、火鉢の横に有る炭箱を蹴る、山盛りに入れたる切炭は下手へ一面に散亂する。それに氣も止めず其儘二階へ上るおさだ、菊子は吃驚して居る、おちかは此の物音に飛上る。

菊丸「あれだわ」

おちか「アッ喫驚した、二人共氣を附けなされ」

おさだ「あたし知らないわ、姐さんよ」

菊丸「二階から手が鳴つたらモウ目が見えないのだもの」

おちか「餘り脫線しすぎるなア」

ト言ひながら飛散りし炭を拾ひ、其跡を掃除する、菊丸は窃と二階の上り口へ耳を立て、おさだを手招して太鼓を持つて來いと手眞似にて知らす、おさだは心得て太鼓持つて傍へ來り、二人は梯子段の上り口にて突然に、

二人「今宵忍ぶなら簑着て笠着て忍ばんせ……」

ト大きな聲を出してうたふ、此の時二階より加藤幸次郎たんぜんがけ、若旦那の拵へにて唖楊子にて降り來り、二人の眞中に立つて居る・其の後に照子はついて降り來る

加藤「おい二人共好い加減にしろい」

おさだ「人が咎めたなら惚けの罰ぢやと云はしやんせ」

加藤「しんから馬鹿だな」

菊丸「しんから〳〵〳〵しんから可愛ひ」

二人「薩摩萇と奈良の霰酒や喰べりやおいしおいし、有難う」

ト二人はお辭儀をする、

加藤「それ御祝儀だ」

ト齒磨粉をパッ〳〵とかける。

菊丸「あら若旦那獣やですよ、良い加減になさい」

加藤「お前方こそ好い加減にせい、朝早くからやつて來て、三味や太鼓で起されたにや堪らないよ」

おさだ「何が早いものですか、モウ十一時ですよ」

加藤「何に俺は八時に起きると言ふのを、こいつが」

ト照子を指して、

加藤「起さないんだもの」

照子「嘘仰在いよ、貴方がお目醒にならんのぢやありませんか」

加藤「おやそれぢやお前今朝何んと言つた、俺が起きると云へば」

照子「あらおよしなさいよ、人の前で共麼事お仰ちや獣やよ」

加藤「だつてお前が今朝……」

照子「よ御座んすよ、何んでも私が悪るいんですよ……」

加藤「夫れぢや手をついて謝れ……」

照子「御免なさい」

ト嬉しそうに手をついて謝る。

加藤「よし許す……」

照子「本統……」

ト加藤の手を取る。

加藤「本統よ……」

照子「でも濟ないお顔だわ、笑つて下さいな」

加藤「ウフフ……許すよ……」

照子「嬉しいわ……」

ト兩人艶めかしく云ふ。

おさだ「チヨイと婆やさん、早く旦那の顔を洗ふお湯を取つて下さいな」

菊丸「傍に居る者が堪らないわ」

おちか「許す……」

加藤「あはゝゝゝこいつは大出來だあはゝゝゝ」

ト照子は加藤を連れて、以前の處にて加藤顏を洗ふおちかは湯を取る、

菊丸「ネエちよいと色氣狂ひねへ」

おさだ「おや姐さんあんな事言てゝよ」

照子「何を言つたの」

菊丸「あらさだチヤン其麼事云つちや厭よ」

おさだ「夫れぢや手をついて謝れ」

菊丸「御免なさい」

おさだ「ウハ……ヨシ許す……」

菊丸「嬉しいわ」

加藤「おい馬鹿にするな」

ト捨白詞にて顏を洗ひ、上手の火鉢の前に座す、同時におちか以前のパン牛乳罐を提ぶ、照子は夫れを取つて加藤の前に据へ、

照子「ネエ貴方、今朝は向ひ酒だこお仰いましたが二三日お頭が痛むのですから後生ですから今朝丈け葡萄酒で我慢して下さいな」

加藤「あゝ奥方の御命令致方なし、是非に及ばん葡萄酒頂戴仕る」

トコツプを出す。

照子「あら變な事お仰ちや厭ですよ、おや貴方此のお手の傷は……」

加藤「昨夜お前が引搔いたのだ」

照子「おやあの傷なの」

トジツト加藤の手を取る、おさだ、菊丸は美しげに瞬もせず、三味と太鼓の撥を持つた儘見詰めて居る、おちかは盆の上に乳沸に乳を入れたのを載せ同じく下手の庭より見

詰めて居る。

加藤「他人だつたら毆打創傷罪だよ」

照子「だつて、あたしだつて御覽なさい、貴方が喰附いた後がこれですわ、他人だつたら喰附き齒形創傷罪ですわ」

加藤「だつて俺の方が傷が大きいよ」

照子「嘘お仰い、あたしの方が大きい事よ」

加藤「それぢや比べて見ようか」

ト双方腕を出して傷を比べる、おさだは突然に太鼓をドン〳〵〳〵と激しく叩く、同時におちかは手に持ち居る乳を盆のまゝ落す。

加藤「アッ喫驚した、怎うした」

照子「さだチヤン、大概におしんか、驚くぢやないか」

おさだ「姐さん貴方こそ大概にして下さいよ、當り前なら二人を打つのですけれど此の太鼓を身がわりに立てたのよ」

菊丸「婆やさん、何か落したのぢやないの」

おちか「乳を皆こぼした」

加藤「おい冗談ぢやないよ、僕、乳がなかつたら困るぢやないか」

照子「婆やさん怎うしたの、何を恍惚して居るのだよ」

おちか「デモ今のお話で私も昔を思出して、廿五の春、黑田樣の馬丁で勇の久さんと、差向ひで……」

加藤「おや〳〵婆さん、冗談ぢやないよ、三十年も昔の惚氣を思ひ出して、乳をこぼしては仕方がないぢやないか」

おちか「乳もこぼすし母樣も、夢にも知らして下さつたら」

ト云いながら落したる乳沸を拾ひ、牛乳の空壜二本提げて入口へ出る、

おちか「假令戀れて死すればこて、一寸乳屋まで乳取りに行て來ます、雲井に近き

御方に鮓屋の娘が惚れらりよか」

ト勝手に口の中で淨瑠璃を語りながら入口を閉めて下手へは入る。

加藤「隨分呑氣な婆アだなア……」

ト此の内、おさだ、菊丸の兩人歌の稽古にかゝる、

菊丸「姐さんよくつて」

おさだ「たのみますよ」

菊丸『唄……』

ト菊丸は唄にかゝる、おさだは太鼓を打つ。加藤は之れを聞きながらパンを食す。照子は火箸を片手に持つて調子を取りながら、合の手を云ふ拍子に加藤の手を叩く、

加藤「ア……痛い〳〵」

照子「アラ御免なさいよ」

ト加藤の手を取りて背める、菊丸は之れを見てツント捻じ向き、唄をうたふ、おさだは太鼓をやけに叩く、此の時揚幕より分家與八、染工場の主人好みの拵へにていで來る、直ぐ本舞臺へ來たりて入口の表札を見て、

與八「一寸御免なさい」

照子「おやお客樣だよ、さだチヤン御苦勞樣」

おさだ「アイヨ……」

ト立上り、入口を開けて變な顏をして、

おさだ「何誰……」

與八「松の家照子樣こは此方ですか」

おさだ「ハイ左樣で……あの折角ですが寄附花人なんかは何方樣でも一切御斷りして居ますので、惡からず」

與八「おいお前さん俺を何んだと思うて居るのぢや」

おさだ「何んぞの御無心で……」

與八「おい馬鹿にしなさんな、私は此處の家へ欺されて入りびたつて居る加藤幸次郎と云ふ二本棒に逢ひに來たのぢや」

ト此の壁にフト加藤は表を見て、

加藤「おや叔父さんですか、之れは驚いたなア、サアお這入りなさい」

與八「おゝ幸次郎か……俺は貴樣等の樣な極道に、叔父さんなんて言はれては恥かしいわい」

照子「若旦那、それぢや彼方が何時も話していらつしやいます、分家の叔父さんでいらつしやいますの」

加藤「さうだ、俺の一番怖い謂はゞ利かない叔父さんサ」

照子「おや〳〵まあ存じません事さて」

ト宜しく思入有つて、下手へ來り、

照子「よく入らして下さいました、此の樣な穢くろしい處へまア御挨拶は後にして、さア御這入り下さいまし」

トおさだに向ひ、

「チヨイごさだちやん、今お前何にを申上げたのサ、失禮な……」

おさだ「だつて姐さん、此方らの眼付があれですから迂濶り間違ふたのサ」

與八「私の眼付の惡いのは產れ附きぢや」

照子「御免遊ばせ、恁う云ふ稼業をして居る者はつい口が惡くつて」

トおさだを振り返り、

照子「チヨイこお詫をなさいよ」

おさだ「怎うも相濟みませんでした、さア何卒お這入り下さいまし」

與八「はい有難う、お前方に用は無いのだけれど、あの極道に少し言ひたい事が有りまして來ましたのぢや、眼付が惡うても泥棒はしませんから御安心なすつてな、御免なさい」

ト思入有つてツツと通り、加藤の火鉢の下手へドツカリと座し、加藤を睨め附けて暫時兩人無言にて思入れ、照子は此間にたんぜんをぬぎ、鏡臺の前に行き化粧を直して羽織と着替へる、菊丸は茶を入れ、おさだに持つて行けと目配せする、おさだは厭やと首を振る、菊丸はおど〳〵しながら與八の前へ茶を持つて行き、

菊丸「お出花一ツ……」

ト與八の前に置く、

與八「いりません……」

菊丸「貴方、お座蒲團をお敷き遊ばせ」

與八「いりません」

ト睨め附ける、菊丸は怖れて下手へ飛んで來て、おさだと顔見合せ、成程惡い目附だとの科、

加藤「叔父さん〳〵、藝者家の内へ來て怖い顔をするものぢやありませんよ」

與八「俺の怖ひ顔は產れ附ぢや」

加藤「だつて甥が藝者家へ入りびたつて居る事を知て、一寸近所迄來た序に寄つて、一杯でも呑んでこようと思ふほど粹になつたのですもの、さアまあ一杯葡萄酒を召上れ」

與八「誰が一杯呑に來たか、馬鹿め、一昨日あたりからお前を探して居るのぢや、ヤツト此處に居る事を突留めて遣つて來たのぢや、叔父さんも今日は覺悟をして來たのぢや」

加藤「又、意見ですか」

與八「フヽン意見を聞く貴樣かへ、今日は加藤の家の爲に、貴樣の決心を聞に來たのぢや」

加藤「御質問に應じて、何んなりとも申上げます、然しまあ御緩りなさいまし」

ト照子に向ひ、

「おいお松、何を後に悄然と立つて居るのぢや、御挨拶をさんかい」

ト之にて照子はおづ〳〵しながら下手で兩手をつき、

照　子「これは初めて御目に掛ります、小田松と申まして、毎々若旦那に御世話になつて居ます不束者、何卒御見知り置かれまして、何分共に……」

與　八「イヤ折角の御挨拶ぢやが、御見知り置かれこう無いのぢや、お前さんにお見知り置かれると、加藤の家も藏も飛んで仕舞ますでな、ハイ此の幸次郎もなア子供の時分から賢い奴で、商業學校も優等で卒業しましたのぢや、それから藝者學校へ這入りまして、お前さんと云ふ教師が附いてから、何も彼も優等で、お蔭で嫁も貰はず、澤山な授業料を貴方に納めて、お蔭で家に大きな穴があいてゐます、ハイ色々と御世話になりまして、叔父から厚う御禮を申上げます」

ト之れにて照子は俯向きてしく〳〵泣く、

加　藤「叔父さん〳〵、其麼皮肉な事を言いなさんな、貴方かて若い時分には覺へが有るでせうがな」

與　八「折角ぢやが、私は恁麼結構な覺えはないのぢや」

加　藤「夫らマア叔父さんなんて云ふ人は、今の叔母さんをお嫁に貰つて、女と云ふ者は内の嬶より外に無いものと思つて入らつしやるのだから無理も有りません、又藝者遊びをして女にもてる人ぢやなし」

與　八「其の代り親や叔父に心配かけた事もないわへ」

加　藤「面白いめに逢つた覺えもないわ」

與　八「親の身代滅らした事もないわ」

加　藤「此の世へ產れた甲斐もないわ」

與　八「何を吐すのぢやへ」

照　子「チョイと貴方、そんな失禮な事を……」

加　藤「だつてそれに違ひないぢやないか」

ト照子の顏を見て、

「何故お前泣いて居るのぢや、叔父さんに何が遠慮じや、何も叔父さんの財産に手をかけたこ言ふぢやなし、何十萬こ有る親父の金ぢや、何れは僕の財産ぢや、減らそふこ殖やそうこ叔父さんは局外中立さ、交戰國に對して中立國は何等發言の權利を有さない、萬國條例に明文を議決してあるのサ……」

與八「戰爭見たいに云ふない、何んぼ中立國でも今度のベルギー見たいなめに逢はされては、勢ひ默つてゐられぬわい」

加藤「憚り樣、獨逸の樣に貴方の財産に侵入しやしませんよ、フヽン獨逸の世話にもならんのだ」

與八「何をッ」

照子「もし、若旦那、お詫びなさいよ貴方……」

ト與八に向ひ、

照子「ねえ貴方、旦那樣、何分あのやうな氣儘な方ですから、何卒御堪辨遊ばして……」

與八「いゝえ捨てゝ置いて貰いませう、今の處何誰の御仲裁でも平和になりませんのぢや、お前は言はゞ交戰國の人間ぢやないか」

加藤「おい〳〵」

ト照子を呼び、

加藤「お前は口を出すな、默つて居れ、大きいこばかりで、何處やらの國こ同じで、後に尻尾がないばかりサ」

與八「コラッ支那人見たいに言ふない、恁麼事を云はせるのは、皆お前さんの御仕込みぢや、ハイ、チャンコロがお禮を申ます」

叩藤「おや又泣いて居るな」

ト照子に云ひながら、おさだと菊丸を見ると二人共涙ぐんで居る。

「おやあの二人も泣いてるよ、傳染しちやつたんだ、ヲイ〳〵菊チヤンさだチヤン、姐さんを其處へ連れて行つて、お稽古をしてお貰ひよ」

菊丸「は……い」

ト涙を拭きながら、照子の傍へ來りて、

菊丸「姐さん此方らへ入らつしやいな、さうしてお稽古をして下さいな」

照子「今そこごころちやない事よ、お客樣が有るのに……」

加藤「いや構はない〳〵、叔父さんなんか三味線の音なんか聞いた事が無いのだから、聞かして上げるも功德さ、遠慮は要らないからおやり〳〵」

與八「さア〳〵遣つておくんなさい〳〵」

ト皮肉らしく云ふ、

照子「それでは御免遊せ」

ト悄々しながら立ち上り下手へ行き、三人は車座になり、宜しく三人思入有つて、菊丸三味線を持つて調子を合す。

加藤「さうして叔父さん、貴方は一體今日何の御用で、恁麼處へ入らつしやつたのです」

與八「何の御用とは幸次郎、貴樣は一體怎う云ふ精神ぢや」

ト言葉强く云ふ、菊丸はチテチチチンシヤンと三味線をひく、

與八「これ可笑な三味線をひきなさんな」

菊丸「おや御免やす」

加藤「叔父さん、合方入りで好いぢやありませんか」

與八「馬鹿な事を吐すな、ヤイ幸次郎、貴樣は本家の一人息子ぢやぞよ、私は分家をして仕舞うて、本家には關係はないと吐すだらうが、お前の親父は私の兄、私とお前は叔父甥ぢや」

加藤「不思議に理屈が合つてますなア」

與八「コラッ馬鹿にするな、今日はお前の決心を一言聞けばそれで宜いのぢや、抑も親類一同が親族會議を開くについて……」

加藤「叔父さん〳〵、判つてる〳〵、貴方の重い口から言はずとも、僕が云つて上げますよ」

ト靜かに菊丸爪びきで三味をひく、

加藤「近い内に親族會議を開けば、屹度僕を廢嫡と決議する、さすれば父が可愛想だから、今の内に改心をして眞面目になれば、私が中へ這入て事を大きくしないで未前に防ぐ、其處はお前の精神一ッぢやと仰るのでせう」

與八「左樣ぢや」

加藤「まア葡萄酒一杯お上り」

ト前にコップを出す、與八はシブ〳〵呑む。

「處で僕に云はせると、廢嫡は無論承知と云ふと叔父さんの顏が潰れるでせう」

與八「怎麼顏は潰れても宜しい」

加藤「叔父さん、さう怒ちや不可ません、叔父さんの顏を潰すと云ふ事は非常に心苦しい、其の御立派なお顏をねえ」

與八「變なもの〻云ひ方をしなさんな」

加藤「物の道理がさうでせう、僕も能く判つてゐるのです、親父が苦心して拵へ上げた今の財產でせう、濟まないと思つて居ますがねへ叔父さん、見てやつて下さい扨てあれの」

ト照子の方を向き、

加藤「顏を見まするとこ、此の頃のあいつの痩せた横顏をねへ……」

與八「痩せたか肥えたか、私や初めて會つたのぢやで判らん」

加藤「夫れがね、あんなぢやなかつたのです、馴れ染頃はみづ〳〵と肥つてねえ生々した女だつたのです、それが叔父さん、御覽なさい、眼も落ち凹んで窶れた姿、一體誰の爲と思つてゐらつしやいます」

與八「お前、私に惚氣を云ふて居るのかへ」

加藤「いゝえ斷じてさうぢやないのです、彼女の優しい心意氣を話して居るのです、同情してやつて下さいと申上ても、迚も叔父さんの頭ぢや此の間の心理狀態が不明です、其結果貴方には皮肉を云はれ、親父には蔭で惡魔の樣に云はれ、人氣は落るし、世間は狹くなるし、何處で彼女の立つ瀬が有るのです、廣い世間に同情してやるのは僕壹人です、怎うせ浮名が立つたからだ、破れかぶれだと、此の頃は此奴の家に入りびたりです、暮に不自由はさしてやらずとも、其處は稼業で世間へ氣兼もして居ます、叔父さん、あの三味線を彈く指を見てやつて下さい、指にも苦勞の窶が見へる、糸の音色も沈み勝ちです、あれを見た日には、親も財産も眼中に無くなるのです、ですから捨てゝ置いて下さい、いくら御意見なすつても駄目です、意見する程藥が利けば、戀の病も直ります、萬事惡からず」

與八「よし判つた、モウ何にも云はぬ、マア遣れる丈けやつて見い」

加藤「富士の山でも九里八町です、戀の山には限りが有りませんからねへ」

ト之れにて與八は呆れて、無言の儘ヅヽト立つて下駄を履く、照子は慌てゝ走りより與八の袖を捕へて、

照子「ねえ貴方、一寸お待ち下さいまし、申上げたい事が御座いますから……」

ト與八は無言の儘ポンと袖をはらひのけ、表へ出て入口をピッシヤリと閉る、おさだはデン〳〵と中の舞の太鼓を叩く、菊丸は其の相方を彈きつゝ笑ふ、與八は揚幕へブリ〳〵として這入る、照子は加藤の傍へ來りて俯伏す。

加藤「あはッはゝゝゝゝ今の鳴物は振つてゐるねへ」

おさだ「デモ餘り憎らしいのですもの、だから囃子入りで歸して上げたわ」

菊丸「歌舞伎なら宜い引込みだわ」
おさだ「全くよ」
二人「あはッはゝゝゝ」
ト笑ふ、照子は泣伏し居る、加藤は之を見て、
加藤「おい照子、何を泣いて居るのだ、馬鹿に氣が弱いねへ」
照子「でも餘り濟まないこ思つてねへ……私、貴方に一寸折入つたお話が御座いますのよ」
ト火鉢の傍へ來る、
加藤「何んだへ、心配さうな顔をして」
照子「實はねへ……」
ト菊丸、おさだをじろりと見る、兩人は思入有つて、
おさだ「姐さん稽古中に濟みませんが、一寸急用を思ひ出しましたから歸るわ」

照子「さう……」
おさだ「菊ちやんも急用が有るでせふ」
菊丸「いゝえ私別に……」
おさだ「アラ焦れつたいねへ……有るでぜう」
ト目配する、菊丸は呑み込んで、
菊丸「有るのよ〳〵、忘れちやつたのよ、姐さん私も歸るわ」
照子「濟みません、明日入らつしやいな」
おさだ「私の方が氣が利かないのたわ、濟みません」
菊丸「若旦那御免なさい」
加藤「二人共歸るのかへ、苦勞人だねへ」
ト此の内、菊丸おさだは庭へ降る、
おさだ「若旦那左樣なら、姐さん何れ明日」

菊丸「姐さん患らはないでねへ」

照子「えゝ有難う……」

二人「左様なら」

ト表へ出て、思入有つて二人は窃と中を覗いている。

加藤「今の叔父貴の事でも心配したのかへ、何んだ急に改まつて話と云ふのは」

照子「若旦那……濟みません……」

トジツト思入有つて、兩手をつきて泣く、

加藤「お前も可愛想だ、都合上二三ケ月も仕送もしないで氣儘斗り言つてサ、モウ暫くだ我慢しろ、貴様も運の悪い女だなア……」

照子「いゝえ私は幸福者、此の儘死んでも本望で御座います」

加藤「變な氣持にさせてくれるな……」

ト加藤はゴロリと横になる、囃子の掛り、照子は立つて男枕をあてがひ、友仙の掻巻をそつとかける、此の内花道より女中お久、手に小風呂敷を持つて出で來る。(風呂敷の中に二千圓と實印入れ有る事)直ぐ舞臺へ來りて、菊丸おさだの二人居るを見て、

お久「何事です」

ト突然に大きな聲を出す、菊丸おさだはハツト驚いて家へ云はぬ様にと兩手を合して無言の儘頼む科、きまり悪き體にて下手へ兩人はいる、

お久「阿呆かいな、アノ人等何にを見て居るのぢやいな、何んの事はない下駄泥棒やがな」

ト此の聲にて照子は家の中より、

照子「おや其の聲はお久ぢやないか」

お久「はい只今……」

ト入口を開けて中へ入る、

照子「何を云つて居るのだね、門口で……」

お　久「いえ只今菊丸さんこおさださんが、入口を細目に開けて家の樣子を見て居るのですもの」

照　子「あら隨分燒餅ねへ……お前あそこへ行つて來て呉れたのだつてねへ」

お　久「公證役場で暇が入りまして、誠に遲そなりました、アノ紹介人の山本に二人の證文を渡しまして、一人は仙臺、壹人は神戸、八百圓と千二百圓」

照　子「これ……」

ト加藤に聲へると言ふ科にて制す、お久は呑込んで、金と實印を渡して、

お　久「二千圓……」

ト大きく言ふ、

照　子「シツ……」

ト制してお久より、金子を請取りそれを其儘懷中へ入れ、錢入より一圓札を取り出してお久に渡し、耳元に口を當て私語く、お久は思入有つて無言の儘表へ出る、靜に入口を閉ると囃子になり、揚幕よりおちか牛乳の壜を二本提げて出來り、花道にてお久と出會ふ、此の間に照子は加藤の前の膳を片附け居る。

お　久「お婆さん何處へ行つたの」

おちか「お久ごんか、先刻若旦那の牛乳をひツくり返してそれを取りにいつたら會社まで行て呉れと養牛舍で云ふによつて、電車で行て來たのぢや、嘸ぞ若旦那は待つて御座るぢやらうな」

お　久「お婆さん〳〵、今歸つたら不可んのぢや、何んぢや知らんが秘密の話が有るらしいで、私も今夜十二時迄活動へでも行つておいでこお暇を貰うたのぢや、お婆さんも氣を利かして、暫く歸らんで置きなされ」

おちか「其塵處へ歸れんな、恰度幸ひぢや、私も一遍内へ歸つて、孫の顏でも見て來うか」

ト歩きながら、

お　久「さうしなはれ〳〵」

おちか「此の乳怎うしやう」

お　久「孫の土産に持つて歸つて上げなされ」

おちか「構まふまいかな……」

お　久「私が請負ふ」

おちか「何んぢや此の頃姐さんは心配が有るらしいなァ」

お　久「一寸可笑いで、二人の抱えを仕替にやつたりして、足元から鳥の立つ樣な話でなァ」

おちか「若旦那大分詰つて居るらしいで」

お　久「お婆さんに判るか」

おちか「此の月私の月給も、まだぢやがな」

お　久「私も……」

ト話にて嚊子になり、極めて自然に二人並んで世間話の樣に言いながら揚幕へはいる

同時に加藤幸兵衛五十位の年配、上品なる實業家の拵へにて家を探す科にてウロ〳〵しながら下手よりいで來る、其の後より洋服姿、折鞄を持つてステツキを持つた三十位の關西綿絲會社の支配人の拵へにて、高岡順吉出で來る。

高　岡「ねえ加藤さん、此の家ぢや有りませんか、松の家としてあります」

幸兵衛「おゝ此の家です」

ト立腹の科にて、入口を手荒く開けて、

幸兵衛「ハイ御免なさい」

トこれにて照子は驚いて、下手へ來り、

照　子「おゝ驚いた、貴下は何誰です」

幸兵衛「はい私は元町二丁目の加藤幸兵衛と云ふ者です、お宅樣へ怜が參つて居りませう」

照　子「エ、……」

ト驚いて加藤の枕元へ走り來り、

照　子「もし若旦那、御親父様が〳〵」

トゆり起す、幸兵衛はツカ〳〵と上にあがりて、

幸兵衛「やい極道めッ」

ト蒲團より引張り出して、加藤を散々打つ、照子は驚いてアレヨ〳〵とばかりに加藤をかばふ、高岡も驚いて靴の儘飛び上り、幸兵衛の手を持つて止める、宜しく此の捨白詞にて、

高　岡「加藤さん〳〵、マア〳〵お待ちなさい、貴方常にも似合はない亂暴な眞似をなさいますな、靜になさいませ、御人格に掛ります」

ト自分の足元に氣をつけて、

高　岡「おや靴の儘だ失敬々々〳〵」

ト下へ降りて、腰をかける、

幸兵衛「いえ〳〵モウ恁麼極道な悴を持つ親、人格も何も御座りません、怎うせ世間樣で笑はれて居ります、何卒捨てゝ置いて下されませ〳〵」

照　子「もうし親旦那樣、何事か存じませんが、若旦那の惡いのは私が惡いので御座います故、御腹が立ちませねば何卒私をお打ち下さいまし、御願ひで御座います〳〵」

幸兵衛「おゝ無論貴下が惡いのぢや、初めて會ひますが、お前さんが松の家の照子さんと仰在る藝者さんですな、初めて參りまして亂暴な眞似をして濟みませんがお前さんもいくらか關係の有る人ぢや、默つて捨てゝ置ひて下さい」

加　藤「お親父さん、靜にして下さい、いくら親の貴方だつて、モウ三十にもなる者を人樣の前で、而も藝者家の家でお打ちになるのは餘りです、何故僕は恁麼目に逢ふのです、僕も外聞もあり名譽が有ります」

幸兵衛「何、名譽ぢや、人並な事を吐すな、其の名譽を重じて居る奴が、三千五百圓ご云ふ金を持逃げした、他人なれば刑事問題ぢやぞ」

加藤「三千五百圓の金ごは、ごの金です」

高岡「幸次郎さん〳〵、白らばくれては不可ません、一昨日です、貴方の親御樣から私の會社へ支拂ふ綿絲の金を三千五百圓お受取りなすつて、其の儘怎麼處へ其の金を持つて入りびたるごは言語同斷です、全く御親父に同情します、僕は本日が日限ですから頂きに出ますご、一昨日悴に持たしてやつたごの事に驚きました、親子間ごは云へ立派な破廉恥罪です」

加藤「相濟みません……」

トジツト思入する、

幸兵衛「相濟みませんで、濟むご思ふか」

ト又立上りかけるを、照子は止めて、

照子「もしお待ち下さいまし、全く私ご云ふ者が有りますから、其麼事も遊ばしたので御座いませう、罪は私に有るのですから、假令此身を賣りましても、吃度御宅へ屆けますから……」

幸兵衛「もし〳〵照子さんごやら、氣を附けて物を云いなされ、憚りながら加藤幸兵衛です、三千五百圓位の端金を遺ひ込まれて、藝者衆から其の金を貢いて頂く程、まだ貧乏して居りません、憚りながらまだ三萬や五萬の金に苦しんで居りませぬから、妙な言譯をして下さいますな」

照子「いゝえ決して左樣な積で申上げたのでは御座いません……」

加藤「照子默れッ、貴樣に用のない話ぢや、暫く二階へ上つて居れ」

照子「だつて私……此の儘……」

加藤「何故俺の言ふ事を聞かない」

照子「はい……御免遊せ……」